

517

517-600



1200501489209

7.9.14

納本

利一著  
横光

春園  
馬車  
館  
乘



五  
五  
五  
五  
五

517-600

目次

↓春は馬車に乗つて……………一

↓蛾はどこにでもゐる……………三

ナポレオンと田蟲……………五

園……………七

街の底……………一〇

慄へる薔薇……………一二

✓無禮な街……………一三





春は馬車に乗って

街へ出るトンネル……………一六七

妻……………二四一

静かなる羅列……………二五一

表現派の役者……………二七三

海濱の松が風に鳴り始めた。庭の片隅で一叢の小さなダリヤが縮んでいった。

彼は妻の寝てゐる寢臺の傍から、泉水の中の鈍い龜の姿を眺めてゐた。龜が泳ぐと、水面から輝り返された明るい水影が、乾いた石の上で揺れてゐた。

『まアね、あなた、あの松の葉が此の頃それは綺麗に光るのよ。』と妻は云つた。

『お前は松の木を見てゐたんだな。』

『ええ、』

『俺は龜を見てたんだ。』

二人はまたそのまま黙り出さうとした。

『お前はそこで長い間寝てゐて、お前の感想は、たつた松の葉が美しく光ると云ふことだけなのか。』

『ええ。だつて、あたし、もう何も考へないことにしてゐるの。』

『人間は何も考へないで寝てゐられる筈がない。』

『そりや考へることは考へるわ。あたし、早くよくなつて、シャツシャツと井戸で洗濯したくつてならないの。』

『洗濯がしたい?』

彼はこの意想外の妻の欲望に笑ひ出した。

『お前はをかした奴だね。俺に長い間苦勞をかけておいて、洗濯がしたいとは變つた奴だ。』

『でも、あんなに丈夫な時が羨ましいの。あなたは不幸な方だね。』

『うむ、』と彼は云つた。

彼は妻を貰ふまでの四五年に渡る彼女の家庭との長い争闘を考へた。それから妻と結婚してから、母と妻との間に挟まれた二年間の苦痛な時間を考へた。彼は母が死に、妻と二人になると、急に妻が胸の病氣で寝て了つた此の一年間の艱難を思ひ出した。

思ふは  
思ふは

『なるほど、俺ももう洗濯がしたくなつた。』

『あたし、いま死んだつてもういいわ。だけどね、あたし、あなたにもつと恩を返してから死にたいの。此の頃あたし、そればかり苦になつて。』

『俺に恩を返すつて、どんなことをするんだね。』

『そりや、あたし、あなたを大切にして、……』

『それから。』

『もつといろいろすることがあるわ。』

——しかし、もうこの女は助からない、と彼は思った。

『俺はさう云ふことは、どうだつていいんだ。ただ俺は、さうだね。俺は、ただ、ドイツのミンヘンあたりへいつペン行つて、それも、雨の降つてゐる所ぢやなくちや行く氣がしない。』

『あたしも行きたい。』と妻は云ふと、急に寢臺の上で腹を波のやうにうねらせた。

『お前は絶対安静だ。』

『いや、いや、あたし、歩きたい。起してよ、ね、ね。』

『駄目だ。』

『あたし、死んだつていいから、』

『死んだつて、始まらない。』

『いいわよ、いいわよ。』

『まア、ぢつとしてるんだ。それから、一生の仕事に、松の葉がどんなに美しく光るかつて云ふ形容詞を、たつた一つ考へ出すのだね。』

妻は黙つて了つた。彼は妻の氣持ちを轉換さすために、柔らかな話題を選択しようとして立ち上つた。

海では午後の波が遠く岩にあたつて散つてゐた。一艘の舟が傾きながら鋭い岬の尖端を廻つていつた。渚では逆巻く濃藍色の背景の上で、子供が二人湯氣の立つた芋を持つて紙屑のやうに坐つてゐた。

彼は自分に向つて次ぎ次ぎに來る苦痛の波を避けようと思つたことはまだなかつた。此夫々に質を違へて襲つて來る苦痛の波の原因は、自分の肉體の存在の最初に於て働いてゐたやうに思はれたからである。彼は苦痛を、譬へば砂糖を甜める舌のやうに、あらゆる感覺の眼を光らせて吟味しながら甜め盡してやらうと決心した。さうして最後に、どの味が美味かつたか。——俺の身體は一本のフラスコだ。何ものよりも、先づ透明でなければならぬ。と、彼は考へた。

ダリヤの莖が干枯びた繩のやうに地の上でむすぼれ出した。潮風が水平線の上から終日吹きつけて來て冬になつた。

彼は砂風の巻き上る中を、一日に二度つつ妻の食べたがる新鮮な鳥の臍物を捜しに出かけて行つた。彼は海岸町の鳥屋といふ鳥屋を片端から訪ねていつて、その黄色い俎の上から一應庭の中を眺め廻してから訊くのである。

『臍物はないか、臍物は。』

彼は運好く瑪瑙のやうな臍物を氷の中から出されると、勇敢な足どりで家に歸つて妻の枕元に並べるのだ。

『この曲玉のやうなのは鳩の腎臟だ。この光澤のある肝臟は、これは家鴨の生膽だ。これはまるで、噛み切つた一片の唇のやうで、此の小さな青い卵は、これは崑崙山の翡翠のやうで。』

すると、彼の饒舌に煽動させられた彼の妻は、最初の接吻を迫るやうに、華やかに床の中で食欲のために身悶えした。彼は慘酷に臍物を奪ひ上げると、直ぐ鍋の中へ投げ込んで了ふのが常であつた。

妻は檻のやうな寢臺の格子の中から、微笑しながら絶えず湧き立つ鍋の中を眺めてゐた。

『お前をここから見ると、實に不思議な獸だね。』と彼は云つた。

『まア、獸だつて。あたし、これでも奥さんよ。』

『うむ、臍物を食べたがつてゐる檻の中の奥さんだ。お前は、いつの場合に於ても、どこか、ほのかに慘忍性を湛へてゐる。』



『それはあなたよ。あなたは理智的で、惨忍性をもつてゐて、いつでも私の傍から放れたがらうとばかり考へていらしつて。』

『それは、檻の中の理論である。』

彼は彼の額に煙り出す片影のやうな皺さへも、敏感に見逃さない妻の感覚を誤魔化すために、此の頃いつも此の結論を用意してゐなければならなかつた。それでも時には、妻の理論は急激に傾きながら、彼の急所を突き通して旋廻することが度々あつた。

『實際、俺はお前の傍に坐つてゐるのは、そりやいやだ。肺病と云ふものは、決して幸福なものではないからだ。』

彼はさう直接妻に向つて逆襲することがあつた。

『さうではないか。俺はお前から離れたとしても、此の庭をぐるぐる廻つてゐるだけだ。俺はいつでも、お前の寝てゐる寢臺から綱をつけられてゐて、その綱の盡く圓周の中で廻つてゐるより仕方がない。これは憐れな状態である以外の、何物でもないではないか。』

女  
籠

『あなたは、あなたは、遊びたいからよ。』と妻は口惜しさうに云つた。

『お前は遊びたかないのかね。』

『あなたは、他の女の方と遊びたいのよ。』

『しかし、さう云ふことを云ひ出して、もし、さうだつたらどうするんだ。』

そこで、妻が泣き出して了ふのが例であつた。彼は、はツとして、また逆に理論を極めて物柔らかに解きほぐして行かねばならなかつた。

『なるほど、俺は、朝から晩まで、お前の枕元にゐなければならぬと云ふのはいやなのだ。それで俺は、一刻も早く、お前をよくしてやるために、かうしてぐるぐる同じ庭の中を廻つてゐるのではないか。これには俺とて一通りのことぢやないさ。』

『それはあなたのためだからよ。私のことを、一寸もよく思つてして下さるんぢやないんだわ。』  
彼はここまで妻から肉迫されて來ると、當然彼女の檻の中の理論にとりひしがれた。だが、果して、自分は自分のためにのみ、此の苦痛を噛み殺してゐるのだらうか。

『それはさうだ、俺はお前の云ふやうに、俺のために何事も忍耐してゐるのにちがひない。しかしだ、俺が俺のために忍耐してゐると云ふことは、一體誰故にこんなことをしてゐなければならぬんだ。俺はお前さへゐなければ、こんな馬鹿な動物園の眞似はしてゐたくないんだ。そこをしておると云ふのは、誰のためだ。お前以外の俺のためだとも云ふのか、馬鹿馬鹿しい。』  
かう云ふ夜になると、妻の熱は定つて九度近くまで昇り出した。彼は一本の理論を鮮明にしたために、氷嚢の口を、開けたり閉めたり、夜通ししなければならなかつた。

しかし、なほ彼は自分の休息する理由の説明を明瞭にするために、此の懲りるべき理由の整理を、殆ど日し続けなければならなかつた。彼は食ふためと、病人を養ふためとに別室で仕事をした。すると、彼女は、また檻の中の理論を持ち出して彼を攻めたてて來るのである。

『あなたは、私の傍をどうしてさう放れたいんでせう。今日はたつた三度より此の部屋へ来て下さらないんですもの。分つてゐてよ。あなたは、さう云ふ人なんですもの。』

『お前と云ふ奴は、俺がどうすればいいと云ふんだ。俺は、お前の病氣をよくするために、薬と

食物とを買はなければならぬんだ。誰がちつとしてゐて金をくれる奴があるものか。お前は俺に手品でも使へと云ふんだね。』

『だつて、仕事なら、ここでも出来るでせう。』と妻は云つた。

『いや、ここでは出来ない。俺はほんの少しでも、お前のことを忘れてゐるときでなければ出来ないんだ。』

『そりやさうですわ。あなたは、二十四時間仕事のことより何も考へない人なんですもの、あたしなんか、どうだつていいんですわ。』

『お前の敵は俺の仕事だ。しかし、お前の敵は、實は絶えずお前を助けてゐるんだよ。』

『あたし、淋しいの。』

『いづれ、誰だつて淋しいにちがひない。』

『あなたはいいわ。仕事があるんですもの。あたしは何もないんだわ。』

『捜せばいいぢやないか。』

『あたしは、あなた以外に捜せないんです。あたしは、ちつと天井を見て寝てばかりゐるんです。』

『もう、そこらでやめてくれ。どつちも淋しいとおかう。俺には締め切りがある。今日書き上げないと、向ふがどんなに困るかしれないんだ。』

『どうせ、あなたはさうよ。あたしより、締め切りの方が大切なんですから。』

『いや、締切と云ふことは、相手のいかなる事情をも退けると云ふ張り札なんだ。俺は此の張り札を見て引き受けて了つた以上、自分の事情なんか考へてはゐられない。』

『さうよ、あなたはそれほど理智的なよ。いつでもさうなの、あたし、さう云ふ理智的な人は、大い嫌ひ。』

『お前は俺の家の者である以上、他から来た張り札に對しては、俺と同じ責任を持たなければならぬ。』

『そんなもの、引き受けなければいいぢやありませんか。』

『しかし、俺とお前の生活はどうなるんだ。』

『あたし、あなたがそんなに冷淡になる位なら、死んだ方がいいの。』

すると、彼は黙つて庭へ飛び降りて深呼吸をした。それから、彼はまた風呂敷を持つて、その日の臍物を買ひにこつそりと町の中へ出かけていった。

しかし、此の彼女の『檻の中の理論』は、その檻に縛られて廻つてゐる彼の理論を、絶えず全身的な興奮をもつて、殆ど間髪の間隙をさへも洩らさずに追つ駈けて來るのである。此のため彼女は、彼女の檻の中で製造する病的な理論の鋭利さのために、自身の肺の組織を日日加速度的に破壊していった。

彼女の會での圓く張つた滑らかな足と手は、竹のやうに痩せて來た。胸は叩けば、軽い張子のやうな音を立てた。さうして、彼女は彼女の好きな鳥の臍物さへも、もう振り向きもしなくなつた。

彼は彼女の食慾をすすめるために、海からとれた新鮮な魚の數々を縁側に並べて説明した。

「これは鮫鱈で踊り疲れた海のビエロ。これは海老で車海老、漁老は甲冑をつけて倒れた海の武者。この鱈は暴風で吹きあげられた木の葉である。」

「あたし、それより聖書を読んでほしい。」と彼女は云つた。

彼はポウロのやうに魚を持つたまま、不吉な豫感に打たれて妻の顔を見た。

「あたし、もう何も食べたかないの、あたし、一日に一度づつ聖書を読んで貰ひたいの。」

そこで、彼は仕方なくその日から汚れたバイブルを取り出して読むことにした。

「エホバよわが祈りをききたまへ。願くばわが號呼の聲の御前にいたらんことを。わが窮苦の日、み顔を蔽ひたまふなかれ。なんぢの耳をわれに傾け、我が呼ぶ日にすみやかに我にこたへたまへ。わがもろもろの日は煙のごとく消え、わが骨は焚木のごとく焚るるなり。わが心は草のごとく撃れてしほれたり。われ糧をくらふを忘れしによる。」

しかし、不吉なことはまた續いた。或る日、暴風の夜が開けた翌日、庭の池の中からあの鈍い龜が逃げて了つてゐた。

彼は妻の病勢がすすむにつれて、彼女の寢臺の傍からますます離れることが出来なくなつた。

彼女の口から、啖が一分毎に出始めた。彼女は自分でそれをとることが出来ない以上、彼がとつてやるよりとるものがなかつた。また彼女は激しい腹痛を訴へ出した。咳の大きな發作が、晝夜を分たず五回ほど突發した。その度に、彼女は自分の胸を引つ掻き廻して苦しんだ。彼は病人とは反對に落ちつかなければならぬと考へた。しかし、彼女は、彼が冷靜になればなるほど、その苦悶の最中に咳を續けながら彼を罵つた。

「人の苦しんでゐるときに、あなたは、あなたは、他のことを考へて。」

「まア、静まれ、いま嘔吐つちや。」

「あなたが、落ちついてゐるから、憎らしいのよ。」

「俺が、いま狼狽ては、」

「やかましい。」

彼女は彼の持つてゐる紙をひつたくると、自分の唾を横なぐりに拭きとつて彼に投げつけた。彼は片手で彼女の全身から流れ出す汗を所を撰ばず拭きながら、片手で彼女の口から咳出す唾を絶えず拭きとつてゐなければならなかつた。彼の蹲んだ腰はしびれて來た。彼女は苦しきまぎれに、天井を睨んだまま、兩手を振つて彼の胸を叩き出した。汗を拭きとる彼のタオルが、彼女の寝巻にひつかかつた。すると、彼女は、蒲團を蹴りつけ、身體をばたばた波打たせて起き上らうとした。

「駄目だ、駄目だ。動いちゃ。」

「苦しい、苦しい。」

「落ちつけ。」

「苦しい。」

「やられるぞ。」

「うるさい。」

彼は楯のやうに打たれながら、彼女のさらさらした胸を撫で擦つた。

しかし、彼は此の苦痛な頂天に於てさへ、妻の健康な時に彼女から與へられた自分の嫉妬の苦しみよりも、寧ろ數段の柔かさがあると思つた。してみると彼は、妻の健康な肉體よりも、此の腐つた肺臟を持ち出した彼女の病體の方が、自分にとつてはより幸福を與へられてゐると云ふことに氣がついた。

——これは新鮮だ。俺はもうこの新鮮な解釋によりすがつてゐるより仕方がない。

彼は此の解釋を思ひ出す度に、海を眺めながら、突然あはあはと大きな聲で笑ひ出した。

すると、妻はまた、檻の中の理論を引き摺り出して苦々しにやがさうに彼を見た。

「いいわ、あたし、あなたが何ぜ笑つたのかちやんと知つてゐるんですもの。」

「いや、俺はお前がよくなつて、洋装をしたがつて、ぴんぴんはしやがれるよりは、靜に寝てゐられる方がどんなに有り難いかしれないんだ。第一、お前はさうしてゐると、蒼ざめてゐて氣品がある。まア、ゆつくり寝てゐてくれ。」

『あなたは、さう云ふ人なんだから。』

『さう云ふ人なればこそ、有り難がつて看病が出来るのだ。』

『看病看病つて、あなたは二言目には看病を持ち出すのね。』

『これは俺の誇りだよ。』

『あたし、こんな看病なら、して欲しくないの。』

『所が、俺が譬へば三分間向ふの部屋へ行つてゐたとする。すると、お前は三日も抛つたらかされたやうに云ふではないか、さア、何とか返答してくれ。』

『あたしは、何も文句を云はずに、看病がして貰ひたいの。いやな顔をされたり、うるさがられたりして看病されたつて、ちつとも有り難いと思はないわ。』

『しかし、看病と云ふのは、本來うるさい性質のものとして出来上つてゐるんだぜ。』

『そりや分つてゐるわ。そこをあたし、黙つてして貰ひたいの。』

『さうだ、まア、お前の看病をするためには、一族郎黨を引きつれて来ておいて、金を百萬圓ほ

ど積みあげて、それから、博士を十人ほどと、看護婦を百人ほどと、』

『あたしは、そんなことなんかして貰ひたかないの、あたし、あなた一人にして貰ひたいの。』

『つまり、俺が一人で、十人の博士の眞似と、百人の看護婦と、百萬圓の頭取の眞似をしろつて云ふんだね。』

『あたし、そんなことなんか云つてやしない。あたし、あなたにちつと傍にゐて貰へば安心出来るの。』

『そら見ろ、だから、少々は俺の顔が顰んだり、文句を云つたりする位は我慢をしる。』

『あたし、死んだら、あなたを怨んで怨んで、そして、死ぬの。』

『それ位のことなら、平氣だね。』

妻は黙つて了つた。しかし、妻はまだ何か彼に斬りつけたくてならないやうに、黙つて必死に頭を研ぎ澄してゐるのを彼は感じた。

しかし彼は、彼女の病勢を進まず彼自身の仕事と生活のことも考へねばならなかつた。だが、

彼は妻の看病と睡眠の不足から、だんだんと疲れて来た。彼が疲れば疲れるほど、彼の仕事が出来なくなるのは分つてゐた。彼の仕事が出来なければ出来ないほど、彼の生活が困り出すのも定つてゐた。それにも拘らず、昂進して来る病人の費用は、彼の生活の困り出すのに比例して増して来るのは明かなことであつた。然も、なほ、いかなることがあらうとも、彼がますます疲労して行くことだけは事實である。

——それなら俺は、どうすれば良いのか。

——もうここらで俺もやられたい。さうしたら、俺は、何に不足なく死んでみせる。

彼はさう思ふことも時々あつた。しかし、また彼は、此の生活の難局をいかにして切り抜けるか、その自分の手腕を一度はつきり見たくもあつた。彼は夜中起されて妻の痛む腹を擦りながら、『なほ、憂きことの積れかし、なほ憂きことの積れかし。』

と呟くのが癖になつた。ふと彼はさう云ふ時、茫々とした青い羅紗の上を、撞かれた球がひとり飄々として轉がつて行くのが眼に浮んだ。

——あれは俺の玉だ、しかし、あの俺の玉を、誰がこんなに出鱈目に突いたのか。

『あなた、もつと、強く擦つてよ、あなたは、どうしてさう面倒臭がりになつたのでせう。もつとさうぢやなかつたわ。もつと親切に、あたしのお腹を擦つて下さつたわ。それなのに、此の頃は、ああ痛、ああ痛。』と彼女は云つた。

『俺もだんだん疲れて来た。もう直ぐ、俺も参るだらう。さうしたら、二人がここで吞氣に寝轉んでゐようぢやないか。』

すると、彼女は急に静になつて、床の下から鳴き出した虫のやうな憐れな聲で呟いた。

『あたし、もうあなたにさんざ我ままを云つたわね。もうあたし、これでいつ死んだつていいわ。あたし満足よ。あなた、もう寝て頂戴な。あたし我慢をしてゐるから。』

彼はさう云はれると、不覺にも涙が出て来て、撫でてゐる腹の手を休める氣がしなくなつた。

庭の芝生が冬の潮風に枯れて来た。硝子戸は終日辻馬車の扉のやうにがたがたと慄へてゐた。

もう彼は家の前に、大きな海のみかへてゐるのを長い間忘れてゐた。

或る日は醫者の所へ妻の薬を貰ひに行つた。

『さうさう。もつと前からあなたに云はう云はうと思つてゐたんですが、』  
と醫者は云つた。

『あなたの奥さんは、もう駄目ですよ。』

『はア。』

彼は自分の顔がだんだん蒼ざめて行くのをはつきりと感じた。

『もう左の肺がありませんし、それに右も、もう餘程進んでをります。』

彼は海濱に添つて、車に揺られながら荷物のやうに歸つて來た。晴れ渡つた明るい海が、彼の顔の前で死をかくまつてゐる單調な幕のやうに、だらりとしてゐた。彼はもうこのまま、いつまでも妻を見たくはないと思つた。もし見なければ、いつまでも妻が生きてゐるのを感じてゐられるにちがひないのだ。

彼は歸ると直ぐ自分の部屋へ這入つた。そこで彼は、どうすれば妻の顔を見なくて済まされるかを考へた。彼はそれから庭へ出ると芝生の上へ寝轉んだ。身體が重くぐつたりと疲れてゐた。涙が力なく流れて來ると彼は枯れた芝生の葉を丹念にむしつてゐた。

『死とは何だ。』

ただ見えなくなるだけだ、と彼は思つた。暫くして、彼は亂れた心を整へて妻の病室へ這入つていつた。

妻は黙つて彼の顔を見詰めてゐた。

『何か冬の花でも入らないか。』

『あなた、泣いてゐたのね。』と妻は云つた。

『いや。』

『さうよ。』

『泣く理由がないぢやないか。』



『もう分つてゐてよ。お醫者さんが何か云つたのね。』

妻はさうひとり定めてかかると、別に悲しさうな顔もせず黙つて天井を眺め出した。彼は妻の枕元の籐椅子に腰を下ろすと、彼女の顔を更めて見覺えて置くやうにぢつと見た。

——もう直ぐ、二人の間の扉は閉められるのだ。

——しかし、彼女も俺も、もうどちらもお互に與へるものは與へて了つた。今は残つてゐるものは何物もない。

その日から、彼は彼女の云ふままに機械のやうに動き出した。さうして、彼は、それが彼女に與へる最後の餞別だと思つてゐた。

或る日、妻はひどく苦しんだ後で彼に云つた。

『ね、あなた、今度モルヒネを買つて来てよ。』

『どうするんだね』

『あたし、飲むの。モルヒネを飲むと、もう眼が醒めずにこのままずっと眠つて了ふんですつ

つ。』

『つまり、死ぬことかい？』

『ええ、あたし、死ぬことなんか一寸も恐くないわ。もう死んだら、どんなにいいかしれないわ。』

『お前も、いつの間にか豪くなつものだね。そこまで行けば、もう人間もいつ死んだつて大丈夫だ。』

『でも、あたしね、あなたに濟まないと思ふのよ。あなたを苦しめてばかりゐたんですもの。御免なさいな。』

『うむ、』と彼は云つた。

『あたし、あなたのお心はそりやよく分つてゐるの。だけど、あたし、こんなに我ままを云つたのも、あたしが云ふんぢやないわ。病氣が云はすんだから。』

『さうだ。病氣だ。』

『あたしね、もう遺言も何も書いてあるの。だけど、今は見せないわ。あたしの床の下にあるから、死んだら見て頂戴。』

彼は黙つて了つた。——事實は悲しむべきことなのだ。それに、まだ悲しむべきことを云ふのは、やめて貰ひたいと彼は思つた。

花壇の石の傍で、ダリヤの球根が掘り出されたまま霜に腐つていつた。龜に代つてどこからか来た野の猫が、彼の空いた書齋の中をのびやかに歩き出した。妻は殆ど終日苦しさのために何も云はずに黙つてゐた。彼女は絶えず、水平線を狙つて海面に突出してゐる遠くの光つた岬ばかりを眺めてゐた。

彼は妻の傍で、彼女に課せられた聖書を時々読み上げた。

『エホバよ、願くば忿怒をもて我をせめ、烈しき怒りをもて我を懲らしめたまふなかれ。エホバよ、われを憐れみたまへ、われ萎み衰ふなり。エホバよわれを醫したまへ、わが骨わななき震

ふ。わが靈魂さへも甚くふるひわななく。エホバよ、かくて幾その時をへたまふや。死にありては汝を思ひ出づることなし。』

彼は妻の啜り泣くのを聞いた。彼は聖書を読むのをやめて妻を見た。

『お前は、今何を考へてゐたんだね。』

『あたしの骨はどこへ行くんでせう。あたし、それが氣になるの。』

——彼女の心は、今、自分の骨を氣にしてゐる。——彼は答へることが出来なかつた。

——もう駄目だ。

彼は頭を垂れるやうに心を垂れた。すると、妻の眼から涙が一層激しく流れて來た。

『どうしたんだ。』

『あたしの骨の行き場がないんだわ。あたし、どうすればいいんでせう。』

彼は答への代りにまた聖書を急いで読み上げた。

『神よ、願くば我を救ひ給へ。大水ながれ來りて我たましひにまで及べり。われ立止なき深き泥

の中に沈めり。われ深水ふかみずにおちいる。おお水わが上を溢れ過ぐ。われ歎きによりて疲れたり。わが喉はかわき、わが目はわが神を待ちわびて衰へぬ。』

彼と妻とは、もう萎れた一對の莖のやうに、日日黙つて並んでゐた。しかし、今は、二人は完全に死の準備をしてつた。もう何事が起らうとも恐わがるものはなくなつた。さうして、彼の暗く落ちついた家の中では、山から運ばれて来る水甕の水が、いつも静まつた心のやうに清らかに満ちてゐた。

彼の妻の眠つてゐる朝は、朝毎に、海面から頭を擡げる新しい陸地の上を素足で歩いた。前夜満潮に打ち上げられた海藻は冷たく彼の足にからまりつた。時には、風に吹かれたやうにさ迷ひ出て来た海邊の童兒が、生々しい緑の海苔に迂りながら岩角をよち登つてゐた。

海面にはだんだん白帆が増していつた。海際の白い道が日増しに賑やかになつて来た。或る日、彼の所へ、知人から思はぬスキートビーの花束が艸を廻つて届けられた。

長らく寒風にさびれ續けた彼の家の中に、初めて早春が匂やかに訪れて来たのである。

彼は花粉にまみれた手で花束を捧げるやうに持ちながら、妻の部屋へ這入つていつた。

『たうとう、春がやつて来た。』

『まア、綺麗だわね。』と妻は云ふと、頬笑みながら痩せ衰へた手を花の方へ差し出した。

『これは實に綺麗ぢやないか。』

『どこから来たの。』

『此の花は馬車に乗つて、海の岸を眞つ先きに春を撒き撒きやつて来たのさ。』

妻は彼から花束を受けると両手で胸いつばいに抱きしめた。さうして、彼女は其の明るい花束の中へ蒼ざめた顔を埋めると、恍惚として眼を閉ぢた。

蛾はどこにもある

一  
 たうたう彼の妻は死んだ。彼は全くぼんやりとして、妻の顔にかかつてゐる白い布を眺めてゐた。昨夜妻の血を吸つた蚊がまだ生きて壁にとまつてゐた。

彼は部屋に鏝をかけたまま長らくそこから出なかつた。彼は蚊が腹に妻の血を蓄へて飛んでゐるのを見ると、妻の死骸よりも、蚊の腹の中で、まだ生きてゐる妻の血に胸がときめくを感じた。

## 二

彼は家をたたむと一時妻の家へ行つてゐた。彼はそこから日日金のある間、氣力を引き立てるために自動車に乗り廻して出歩いてゐた。しかし、彼は妻の葬に示してくれた多くの知己の好意

を思ひ出すと、それはまだ一本の禮状さへ出してない自分のだらしなさが、突然ぼんやりした心の上へ重々しくのしかかつて來た。

『とにかく今は赦して貰ひたい。俺は、今は何も出來ないんだ。赦してくれ、赦してくれ。』

彼はさう呟きながら、またふらふら自動車に乗り歩き、夜遅く妻の家へ疲れた身體で歸つて來た。しかし、さて寝やうとすると、いつも義妹の身體がひとり蚊帳の中で青白くぐつたりと眠つてゐた。

## 三

彼はだんだん義妹の身體が恐くなつた。或る日、彼は黙つて妻の家から逃げ出した。全く彼の行爲は、彼女の家人にとつて疑はしいことに相違なかつた。しかし、彼としてみればその場合それ以外の方法を考へ出すことは出來なかつた。

彼は新らしい生活の荷物として、先づ軽い齒ブラシとタオルとを買つて恩師の家へよつた。そ

こで彼は好意ある恩師の言葉のままに暫くそこに落ちつくことにした。

その夜彼は寝やうとして寝巻を着替へにかかると、不意に一疋の白い蛾が粉を飛ばせて彼の頬へ突きあたつた。彼は、はッしと掌で蛾を打つた。蛾は彼に打ち落とされたまま、暫く苦しさうにばたばた重厚な羽根で畳の上を叩いてゐた。と、どこに力があつたのか、突如として蛾はまた彼を目がけて奇怪な速さで突きかかつて來た。彼はひらりと身を低くめた。蛾は障子の棧にあたと再びそこから彼の腰を睨つて飛びかかつた。

『此奴、何者だッ。』と彼は思つた。彼は直ぐまた蛾を掌で打ち降ろすと、部屋の隅に突き立つたまま暫く蛾の姿を眺めてゐた。

#### 四

次の日、彼はぶらりと旅に出た。彼は此の頃漸く自然の美しさが彼なりに分りかけて來たやうに思はれた。彼は物を見るとき、なるだけその物の形だけを見るやうにと心掛けた。形だけを見

てゐると、いかに些細な物體にもそれ相應の品位と性格とがあつた。さう云ふ彼の物の見方に一番多く見られてゐたのは、彼の亡くなつた妻であつた。凡そいかなる物の觀じ方があらうとも、死は形が亡くなると云ふことにちがひなかつた。彼の常に一番眼に觸れてゐた形である空と妻との二つのうち、最も美妙に動き續けて茫々たる空の倦怠を破つてゐた妻の形が、俄に彼の眼界から無くなつたと云ふことは、とにかくこれから空漠たる空のみ絶えず彼の相對として眼に觸れると云ふ豫想からばかりでも、彼にとつて此の生活と云ふ風景は全く色褪せた代物しろものであつた。

彼は旅行に出やうとして恩師の家の門を出ると、もういきなり疲勞を感じた。彼は直ぐそのまま同じ街のホテルへ行つてベッドの上へ仰ふ向きに寝た。

『死とは何だ。死とは？』

しかし、どうして左様にわれわれは死を考へねばならぬのか――

彼は自分の疑問に逆手を打つと寝て了つた。それから彼は夜中に眼が醒めた。すると、ぼんやり彼の見てゐる眞上の蚊帳の腹の上で、一疋の蛾が、彼の寝てゐる匂ひを嗅ぐやうに羽根を描へ

てちつとしてゐた。

五

彼は次の日、友人達の多くゐる海岸町へ行つてみた。その海岸では、裸體の男女の群れが輝く大きな海岸線にまはりついて華やかに戯れてゐた。そこは全く別世界だ。

『これは生きてゐる。』と彼は思った。

『青春とは有り難い。』

彼は思はず双手を空に上げたくなつた。いかに夫婦生活が牢獄であらうとも、彼は一度妻の健康な身體を抱いて人並に此の海の中を快活に泳いでみたかつた。もし出來得べくんば、妻をして悄然と自分の影に佇ませずに、群がる男の裸體の中へ潑刺と馳け込ませ、閃めく彼女の肉體から爽やかな昂奮を感じたかつた

その夜、彼は生れて初めての夏の多彩な海岸に眩惑されたまま、久し振りに生々としてゐた。

が、さて寝やうとすると、また一疋の大きな白い蛾が彼の肩さきにとまつてゐた。

『これはおかしい。』と彼は思った。

彼は暫く蛾をちつと見詰めて立つてゐた。

『これは妻だ。』

ふと彼はさう思つた。すると、俄に、前々夜から引き續いて彼の周圍を舞ひ續けて來た蛾の姿が、戀々とした妻の心の迷ひのやうに思はれ出した。

彼より先に床の上へ寝轉んで彼の様子を見てゐた友人のIは、急に起き上つた。

『何んだ、蛾か。』

『蛾だ。』

『よし。』とIは云ふと、いきなり蛾をひつ攫んだ。

『どうするんだ？』

『殺すんだ。』

「よしてくれ。」と彼は強く云つた。

Iは蛾を握つたまま暫く彼の険しい顔を眺めてゐた。彼は此の不意に起つて來た自分の氣持ちを勿論知らう筈もないIの不思議さうな顔に好意を感じた。

「此奴は俺の死んだ家内なんだよ。紙で包んでそつと捨ててやつてくれないか。」

「よしよし」とIは笑ひながら穩やかに云ふと、蛾を窓の外へ捨てて了つた。彼は床の上へ寝ながら、どうして妻が自分に蛾を彼女だと思はせるのかと考へた。もつとも彼自身を彼だと思ふのと、蛾を妻だと思ふのはさう大した變りはなからう筈なのに、しかし、それにしてもわざわざ今の場合、蛾を特に自分の妻だと思ふ自分の氣持が彼には奇怪なことに思はれてならなかつた。

## 六

彼は一週間もするともう華やかな海岸線から倦いて來た。そこで波に洗はれてゐる裸體の人々の形は、彼にとつて別にあの倦怠極まる空の形を變化さすほど、それほど魅力のある何物でもないのが分つてくると、彼はまたぼんやりと恩師の家へ歸つて來た。

彼はこゝでも、夜いよいよ寢やうとするとき習慣的に蛾が身の周圍にゐないかと思廻した。すると、いつの夜でもどこかに必ず定つてゐるやうに、また白い一疋の蛾がちゃんと彼の頭の横で待つてゐた。

「實に不思議だ。これは、しかし、全く不思議な奴だ。おい。」と彼は云つた。

彼は蛾に近ぢかと頭を寄せて彼女の意志を読みとるやうに蛾を見詰めた。だが、彼はあの愛すべき妻が、事もあらうに此の憐れな蛾の姿になつてゐると思ふと、それはいかに愚かな彼自身の空想だと考へたとしても涙を流さずにはをれなかつた。彼は蛾を掌の上に乗せながら妻の死の間際に云つた言葉や顔を思ひ出した。――

『もうYは一人ぼつちになるんだわ。私が死んだら、もうYの事をしてやるものが誰もないわ。よしあつたとしても、無論彼女のそのやうではないにちがひない。が、しかし、どうして彼女についての此の強烈な思ひ出が、かやうに自分を苦めるのか、と彼は考へた。いやそれよりも、



彼はいかに自分と離れることを苦しがつたか計り知れない妻の念力を感じると、此のときこそ掌の上の一疋の蛾が、無氣味にひつそりとした物音のやうに生き生きと妻の亡靈に感じられた。寤に此の一疋の蛾が、實に明らかに一疋の蛾であるに過ぎないと云ひ得るごとく、此一疋の蛾が、實に明かに妻ではないとどうして云ひ得ることが出来るであらう。――

## 七

その次の夜、夜が深まるにつれて彼は蛾のことが氣になり出した。彼は夜の深みの中でいつの間にか成り出した果實のやうな丸窓の黒い色を絶えず見た。蛾がもし彼の身邊に忍び込むとすれば、そこからちがひないことを明らかにするやうに、彼は周囲の襖や障子を閉めてをいた。暫くすると、母屋から離れた靜かな廊下の向ふから人の足音が聞えて來た。

「Yさん、Yさん。」

「はア。」

襖の向ふから呼んだのは恩師の姪の哲子である。

「おらつしやるの。」

「おます。」

「あのね、」

「ええ、」

「這入つてもいい？」

「どうぞ。」と彼は云つた。

襖が開くと哲子はそわそわしながら近かよつて來た。

「あのね、あなたにぜひ逢ひたいつて云ふ方があるの。」

「はア。」

「逢つてあげて下さいな。女の方よ。」

「はア」と彼は答へた。

『あなたに逢ひたい逢ひたいつて云つて、私どうしやうかと思つただけど、あなた、逢つて上げて下さいよ。』

『誰です?』と彼は訊いた。

『それが私もはつきりまだ訊かないの。まだあなたに逢つたことがないんですつて、さつき私、門の前にゐたら、あなたがゐらつしやるかつて訊くんでせう。だから、私、つひうっかりしてゐらつしやるつて云つちやつたの。』

『ぢや、逢ひませう。』と彼は云つた。

『さう。有り難いわ。ぢや連れて来てよ。私、もしかしたら、あなたにいけないかと思つただけど、美しい方なんですもの。』

彼女はさう云ひながら、もう浮き浮きとして廊下の方へ馳けて行つた。しかし、何ぜ彼女はあのやうに彼に女を逢はすことを喜んでゐるのだらう、と彼は思つた。

すると、不意に彼の描いてゐた廊下の長さを渡つて来る時間よりも奇怪に早く、トントンと輕

い足音が聞えて來た。實際それは意想外の早さで、彼が一と數へてゐるときもう事實は二の終りまで進んでゐると云つた行動で、全くこれも不意に襖がさつと開かれた。

しかし、これは何と美しく青さめた女だらう。——これは妻の亡靈ではないかとまた彼は思ひ出した。全く彼女は妻と似た形ではないとしても、蛾に變り得る妻ならいづれ彼女に變り得られる筈ではないか。——女は彼にお辭儀をした。

『こちらへ、と彼は云つた。』

女は黙つて疊の上に坐ると彼の顔を眞直ぐに眺めてゐた。

『何か僕に御用でもおありですか。』と彼は訊いた。

『いいえ、あのう私、ただお逢ひしたかつただけですの。』と女は云つた。

『さう。しかし、どうして僕がここにゐるつて云ふことを御存知だつたんです?』

『私、あなたがきつとここにゐらつしやると思ひましたの。』

勿論、彼が此の恩師の家にあると云ふこと位は、彼の近況を想像すれば誰にでも直ぐ推定出來

ることにはちがひなかつた。

『ぢや、あなたは僕の家内が亡くなつたのを御存知ですね。』

『ええ、存じてをります。』と女は答へた。

しかし、此の女が妻の亡霊ではないとどこをもつて考へるのか、と彼は考へた。が、しかしまた此の女を妻の亡霊だと考へることは、蛾を彼が妻だと思つたことより餘りに奇怪を好みすぎた勝手な考へ方だと氣がついた。

それにしても事件は不思議に彼の好みにあつた程度に應じて奇怪である。もしも此の奇怪さを利用して女を妻だと決定的に思ひ得るなら、これに越した楽しみはまたとあらうか――

彼は彼の想像力が、次第に眼前の女を妻だと強ひても思ひ得られるに完全な答へを女の舉動と言葉とから得たくなつた。全く彼が一疋の蛾を妻だと思ふことが出来たなら、あの蛾よりもはるかに完全に妻に似てゐる形の女を妻だと思ひ得られない筈がない。

『あなたは僕の家内の死んだことをどうして御存知になつたんです？』

『私、あなたのお書きになつたものを拜見しましたの。』

『ああ、』と彼は頷いた。

これでは女がだんだんと彼の喜ばしき幻覺の中の妻の亡霊から遠のいて行くのは間もなくであつた。彼は傍の香爐の中で手なぐさみに香を焚いた。

『あなたは。』と彼は何かを問ひかけた。が、別に問ふ氣ではなかつたのだと氣がついた拍子に、

『え？』と女は訊き返した。

『いや、』

彼は黙つて了つた。

『あなたの奥さまはお若くつてゐらつしやいましたの？』と女は訊いた。

『ええ、二十一です。』

『あら。』

『ぢや、あなたも？』

『ええ。』

『なるほど。』

さう云ふ所が確にある。

二人は暫く黙つてゐた。

『あなたはどこかお悪いんですか？』と彼は訊いた。

『ええ、もう胸の方が。』と女は言つたまま下を向いた。

——これも妻の病氣と同じではないか。

しかし、かうも妻と同じだと云ふことは、妻とは全く別の女だと云ふことを何故かくも突如として鮮明に感じさすのか。彼は彼女が彼と妻とのことを讀んで彼に逢ひたくなつたと思ふ氣持ちは直ぐ分る。どこに奇怪な何物があらう。しかし、今の場合奇怪ではないと云ふことは彼女が妻だと思ひ得られない確實な事實を想像し得たが故であらうか。

だが、それにしても彼女はあまりに青ざめて美しすぎる。それは夜の花のやうに絶えだえなも

のではない。どこか愁麗な夜のレールのやうに青ざめて光つてゐる。此の夜の深まつた一室に閉じ籠つてゐる男の前に、不意に鋭い輝きをもつて現れた敏捷な女の静けさはいづれ奇怪な事實にちがひないのだ。

『まア、此の部屋はどうしてかう風が吹くんでせう。』と暫くして女は云つた。

風が吹く？——

『どこに風が吹いてゐるんです。』

『あら、こんなに風が吹いてゐるぢやありませんか。』

『風が？』と彼は云ふと、はツと耳を立てるやうに心を立てて部屋の中を見廻した。

しかし、彼には風と云ふ風は部屋のどこの隅にも吹いてゐるとは思へなかつた。ただ香爐から昇る煙りがもの静かな煙のやうに靡いてゐるにすぎなかつた。

彼はぢつと身を沈めるやうにして女の顔を見詰めてゐた。すると、女は眼を光らせながら身體を後ろに反らすと、自分の身邊を索るやうに見廻した。

「まあ、どうしたんでせう。こんなに……」

「風が？」

「ええ。」

「不思議だ。」

彼は自分の感覚を疑ふべきか女の感覚を輕蔑すべきかに迷ひ出した。事實は明らかに怪談ではない。それにも拘らず、此の風の有無について此のやうに驚きを感じるとは、これは何たる事であらう。果して事實は怪談であるのかないのか。彼はこの區別に朦朧としてゐると、

「あッ」と女は悲鳴を上げて立ち上つた。

見ると、一疋の蛾が彼女の片手に拂はれてばたばたと畳の上で藻掻いてゐた。

「妻が來た。」と彼は思った。

すると、蛾はまた羽根で畳を叩きながらしつこく女の方へ進んでいつた。

「あッ、あッ、」と女はけたたましい叫びを發して部屋の片隅へ馳けすくんだ。

彼は蛾を掴むで捨てることが出来なかつた。少くとも、女を妻だと思ふより蛾を妻だと強く思つてゐる彼としては、その自分の妻を捨てて女を助けると云ふことは出来なかつた。と、女は蛾が彼女の足もとまで羽ばたきながら近か寄つたとき、急に襖を開けて部屋の外へ飛び出した。その瞬間、彼は女が悶絶するほどの恐怖を浮べてさツと振り廻された衣のやうに翻つた姿を見た。

## 八

そのまま女はもう再び彼の所へは來なかつた。翌朝彼はひとりまた旅に出た。彼は前夜の不思議な女に關しては、ただ女が偶然にも蛾に本能的な恐怖を持つてゐたにすぎないと、ごく平凡な解釋を下して満足しやうとした。

それなら、あの蛾は？

いや、夏だ、蛾ならどこの電燈の下にだつてゐるにちがいない。

彼は夜旦町へ着くと、ホテルの日本間を借りて直ぐ仰向きに寝た。彼はのびのびと両手を横に

大きく擴げて出来るだけ大の字形になつてみた。彼はもうそこから出来ることなら動きたくはなかつた。しかし、もし本當に動かなくてすませるものなら、人の通らぬ野の雑草の中へ頭を突つ込んでいつまでも倒れてゐたかつた。

『どんな不思議なことがあらうとも、どんな奇怪なことがあらうとも、それは一體自分にとつてどうしたことだ。動くものは動くが良い。廻るものは廻るが良い。』

彼は眼を瞑つて何事も考へまいとしてゐると、女中が夜の膳を運んで來た。彼は起き上つて箸をとつた。

『とにかく、俺は腹が空いて仕方がない。これだけは事實だ』彼は膳に箸をつけやうとして、ふと膳を見ると、また、一疋の蛾がちつと膳の縁にとまつたまま彼を見てゐた。彼は寒さを感じた。彼は暫く箸を持つたまま動けなかつた。

『いや、夏だ、蛾はどこにだつてゐるにちがひない。』

彼は敢然として刺身を口に投げ込んだ。

## ナポレオンと田虫

ナポレオン。ボナパルトの腹は、チュイレリーの觀臺の上で、折からの虹と對戦するかのやうに張り合つてゐた。その剛壯な腹の頂點では、コルシカ産の瑪瑙の釦が巴里の半景を歪ませながら、幽かに妃の指紋のために曇つてゐた。

ネー將軍はナポレオンの背後から、ルクサンブールの空にその先端を消してゐる虹の足を眺めてゐた。すると、ナポレオンは不意にネーの肩に手をかけた。

『お前はヨーロッパを征服する奴は何者だと思ふ。』

『それは陛下が一番よく御存知でございます。』

『いや、余よりもよく知つてゐる奴がゐさうに思ふ。』

『何者でございます。』

ナポレオンは答への代りに、いきなりネーのバンドの留金がチヨツキの下から、きらきらと夕榮に輝く程強く彼の肩を揺すつて笑ひ出した。

ネーにはナポレオンの此の奇怪な哄笑の心理が分らなかつた。ただ彼に揺すられながら、恐るべき易ひから逃がれた蠻人のやうな大きな哄笑を身近に感じただけである。

『陛下、いかがなさいました。』

彼は語尾の言葉のままに口を開けて、暫くナポレオンの顔を眺めてゐた。ナポレオンの唇は、間もなくサン・クルウの白い街道の遠景の上で、皮肉な線を描き出した。ネーには、此のグロテスクな中に弱味を示したナポレオンの風貌は初めてであつた。

『陛下、そのヨーロッパを征服する奴は何者でございます？』

『余だ、余だ。』とナポレオンは片手を上げて冗談を示すと、階段の方へ歩き出した。

ネーは彼の後から、いつもと違つたナポレオンの狂つた青い肩の均衡を見詰めてゐた。

『ネー、今夜はモロツコの燕の巢をお前にやらう。ダントンがそれを食ひたさに、椅子から轉が

り落ちたと云ふ代物だ。」

二

その日のナポレオンの奇怪な哄笑に驚いたネー將軍の感覺は正當であつた。ナポレオンの腹の上では、經五寸の田虫が地圖のやうに猖獗を極めてゐた。此の事實を知つてゐたものは、貞淑無二な彼の前皇后ジョセフイヌただ一人であつた。

彼の肉體に此の植物の繁茂し始めた歴史の最初は、彼の雄圖を確證した伊太利征伐のロヂの戦の時である。彼の眼前で彼の率いた一兵卒が、彈丸に撃ち抜かれて轉倒した。彼はその銃を拾ひ上げると、先途を切つて敵陣の中へ突入した。彼に續いて一隊の兵卒は動き出した。それに續いて一大隊が、一聯隊が、さうして敵軍は崩れ出した。ナポレオンの燦然たる榮光はその時から初まつた。だが、彼の生涯を通じて、アングロサクソンのやうに彼を苦しめた田虫もまた、同時にそのときの一兵卒の銃から彼の肉體へ移つて來た。

ナポレオンの田虫は頑癬の一種であつた。それは總ゆる皮膚病の中で、最も頑強な痒さを與へて輪廓的に擴がる性質をもつてゐた。搔けば花瓣を踏みにぢつたやうな汗が出た。乾けば素焼のやうに素朴な白色を現した。だが、その表面に一度爪が當つたときは、此の濕疹性の白癬は全圖を擡げて猛然と活動を開始した。

或る日、ナポレオンは侍醫を密かに呼ぶと、古い太鼓の皮のやうに光澤の消えた腹を出した。侍醫は彼の腹の傍へ恭儉な禿頭を近寄せて咬いた。

『Trichophycia, Eczema, Marginatum.』

彼は頭を傾け變へるとポナバルトに云つた。

『閣下、これは東洋の墨をお用ひにならなければなりません。』

此の時から、ナポレオンの腹の上には、東洋の墨が田虫の輪廓に従つて黒々と大きな地圖を描き出した。しかし、ナポレオンの田虫は西班牙とはちがつてゐた。彼の爪が勃々たる雄圖をもつて、彼の腹を引つ搔き廻せば廻すほど、田虫はますます横に分裂した。ナポレオンの腹の上で、



東洋の墨はますますその版圖を擴張した。恰もそれは、ナポレオンの軍馬が、破竹のごとくオーストリアの領土を侵蝕して行く地圖の姿に相似してゐた。——此の時から、ナポレオンの奇怪な哄笑は深夜の部屋の中で人知れず始められた。

彼の田虫の活動はナポレオンの全身を戦慄させた。その活動の最高頂は常に深夜に定つてゐた。彼の肉體が毛布の中で自身の温度のために膨脹する。彼の田虫は分裂する。彼の爪は痒さに従つて活動する。すると、ますます活動するのは田虫であつた。ナポレオンの爪は、彼の強烈な意志のままに暴力を振つて對抗した。しかし、田虫には意志がなかつた。ナポレオンの爪に猛烈な征服慾があればあるほど、田虫の戦闘力は紫色を呈して強まつた。全世界を震撼させたナポレオンの一個の意志は、全力を上げて、一枚の紙のごとき田虫と共に格闘した。しかし、最後にのた打ちながら屈服しなければならなかつたものは、ナポレオン・ボナパルトであつた。彼は高價な寢臺の彫刻に腹を當てて、打ちひしがれた獅子のやうに腹這ひながら奇怪な哄笑を洩すのだ。

『余はナポレオン・ボナパルトだ。余は何者をも恐れぬぞ。余はナポレオン・ボナパルトだ。』

かうしてボナパルトの知られざる夜はいつも長く明けていつた。その翌日になると、彼の政務の執行力は、論理のままに異常な果斷を猛々しく現すのが常であつた。それは丁度、彼の猛烈な活力が昨夜の頑癪に復讐してゐるかのやうであつた。

さうして、彼は伊太利を征服し、西班牙を牽制し、エヂプトへ突入し、オーストリアとデンマルクとスエーデンとを侵略してフランス皇帝の位についた。

此の間、彼の此の異常な果斷のために戦死したフランスの壯丁は、百七十萬人を數へられた。國內には廢兵が充満した。禱りの聲が各戸の入口から聞えて來た。行人の喪章は到る所に見受けられた。しかし、ナポレオンは、まだ密かにロシアを遠征する機會を狙つてやめなかつた。此の蓋世不拔の一代の英氣は、またナポレオンの腹の田虫をいつまでも癒す暇を與へなかつた。さうして、彼の田虫は彼の腹へ癌のやうにますます深刻に根を張つていつた。此の腹に田虫を繁茂させながら、なほ且つヨーロッパの天地を攪亂させてゐるナポレオンの姿を見てゐると、それは丁度、彼の腹の上の奇怪な田虫が、黙々としてヨーロッパの天地を攪亂してゐるかのやうであつた。

ナポレオンはジェーエーブローの條約を締結してオーストリアから凱旋すると、彼の糟糠の妻ジョセフィヌを離婚した。さうして、彼はフランス皇帝の權威を完全に確立せんがため、新らしき皇妃、十八歳のマリア・ルイザを彼の敵國オーストリアから迎へた。彼女はハプスブルグ家、オーストリア神聖羅馬皇帝の娘である。彼女の部屋はチュイレリーの宮殿の中で、ナポレオンの寢室の隣りに設けられた。しかし、新らしきナポレオン・ボナパルトは、また此の古い宮殿の寢室の中で、彼の老大な田虫の輪廓と格闘を続けなければならなかつた。

ナポレオンは若くして麗しいルイザを愛した。彼の前皇后ジョセフィヌはロベスピエールに殺されたボルネー伯の妻であつた。彼女はナポレオンより六歳の年上で先夫の子を二人までも持つてゐた。今、彼はルイザを見ると、その若々しい肉體はジョセフィヌに比べて、割られた果實のやうに新鮮に感じられた。だが、そのとき彼自身の年齢は最早や四十一歳の坂にゐた。彼は自身

の頑癪を持つた古々しい平民の肉體と、ルイザの若々しい十八の高貴なハプスブルグの肉體とを比べることは淋しかつた。彼は絶えず、前皇后ジョセフィヌが彼から壓迫を感じたと同様に、今彼はハプスブルグの娘、ルイザから壓迫されねばならなかつた。此のため、彼は彼女の肉體からの壓迫を押しつけ返すためにさへも、なほ自身の版圖をますますヨーロッパに擴げねばをけなかつた。何ぜなら、コルシカの平民ナポレオンが、オーストリアの皇女ハプスブルグのかくも若く美しき娘を持ち得たことは、彼がヨーロッパ三百萬の兵士を殺して勝ち得た彼の版圖の強大な力であつたから、彼はルイザを見たと同時に、油を注がれた火のやうにいよいよロシア侵略の壯圖を胸に描いた。殊に彼はルイザを皇后に決定する以前、彼の撰定した女はロシア皇帝の妹アンナであつた。しかし、ロシアは彼の懇望を拒絶した。さうして、第二に撰ばれたものは此のハプスブルグの娘ルイザである。ルイザにとつて、ロシアは良人の心を牽きつけた美しきアンナの住ふ國であつた。だが、ナポレオンにとつては、ロシアは彼の愛するルイザの微笑を見んがためばかりにさへも、征服せらるべき國であつた。左様に彼はルイザを愛し出した。彼が彼女を愛すれば愛す

るほど、彼の何よりも恐れ始めたことは、此の新らしい崇高優美なハプスブルグの娘に、彼の醜い腹の頑癬を見られることとなつて來た。もし出來得ることであるならば、彼は此のとき、フランス皇帝ナポレオン。ポナパルトの莊嚴な肉體の價値のために、彼の伊太利と腹の田虫とを交換したかも知れなかつた。かうして森嚴な傳統の娘、ハプスブルグのルイザを妻としたコルシカ島の平民ナポレオンは、一度ヨーロッパ最高の君主となつて納まると、今迄彼の幸運を支へて來た彼自身の恵れた英氣は、俄然として虚榮心に變つて來た。此のときから、彼のさしもの天賦の幸運は揺れ始めた。それは丁度、彼の田虫が彼を幸福の絶頂から引き摺り落すべき醜惡な平民の體臭を、彼の腹から嗅ぎつけたかのやうであつた。

## 四

千八百四年、パリーの春は深まつていつた。さうして、ロシアの大平原からは氷が溶けた。或る日、ナポレオンはその勃々たる傲慢な虚榮のままに、いよいよ國民にとつて最も苦痛なロ

シア遠征を決議せんとして諸將を官殿に集合した。その夜、議事の進行するに連れて、思はずもナポレオンの無謀な意志に反對する諸將が續々と現れ出した。此のためナポレオンは、終に遠征の反對者將軍デクレスと數時間に渡つて激論を戦はさなければならなかつた。デクレスはナポレオンの征戰に次ぐ征戰のため、フランス國の財政の缺亡と人口の減少と、人民の怨嗟と戰ひに對する國民の飽滿とを指摘してナポレオンに詰め寄つた。だが、ナポレオンはヨーロッパの平和克復の使命を楯にとつて應じなかつた。デクレスは最後に席を蹴つて立ち上ると、慰撫する傍のネー將軍に向つて云つた。

『陛下は氣が狂つた。陛下は全フランスを殺すであらう。萬事終つた。ネー將軍よ、さらばである。』

ナポレオンはデクレスが歸ると、憤懣の色を表してひとり自分の寢室へ戻つて來た。だが、彼は此の大遠征の計畫の裏に、絶えず自分のルイザに對する弱い歡心が潜んでゐたのを考へた。殊にそのため部下の諸將と争はなければならなかつた此の夜の會議の終局を思ふと、彼は腹立たし

い淋しさの中で次第にルイザが不快に重苦しくなつて來た。さうして、彼の胸底からは古いジョセフイヌの愛がちらちらと光りを上げた。彼は此の夜、そのまま皇妃ルイザにも逢はずひとり怒りながら眠りについた。

ナポレオンの寢室では、寒水石の寢臺が、ペルシヤの鹿を浮べた緋の緞帳に囲まれて彼の寢顔を捧げてゐた。夜は更けていつた。廣い宮殿の廻廊からは人影が消えてただ裸像の彫刻だけが黙然と立つてゐた。すると、突然、ナポレオンの腹の上で、彼の太い十本の指が固まつた鍵のやうに動き出した。指は彼の寢卷を搔きむしつた。彼の腹は白痴のやうな田虫を浮べて寢衣の襟の中から現れた。彼の爪は再び迅速な速さで腹の頑癬を搔き始めた。頑癬からは白い脱皮がめくられて來た。さうして、暫くは森閑とした宮殿の中で、脱皮を搔きむしるナポレオンの爪音だけが啞くやうにぼりぼりと聞えてゐた。と、俄に彼の太い眉毛は全身の苦痛を受け留めて慄へて來た。

『余はナポレオン・ボナパルトだ。余はナポレオン・ボナパルトだ。』

彼は足に纏はる絹の夜具を蹴りつけた。

『余は、余は。』

彼は張り切つた綱が切れたやうに、突如として笑ひ出した。だが、忽ち彼の笑聲が鎮まると、彼の腹は、獸を入れた袋のやうに波打ち出した。彼はがばと跳ね返つた。彼の片手は緞帳の襷をひつ攫んだ。紅の襷は鋭い線を一握の拳の中に集めながら、一揺れ毎に環を鳴らして迂り出した。彼は枕を攫んで投げつけた。彼はピラミッドを浮べた寢臺の彫刻へ廣い額を擦りつけた。ナポレオンの汗はピラミッドの斜線の中へにぢみ込んだ。緞帳は揺れ続けた。と、彼は寢臺の上に跳ね起きた。すると、再び彼は笑ひ出した。

『余は、余は、何物をも恐れはせぬぞ。余はアルプスを征服した。余はプロシヤを撃ち破つた。余はオーストリアを蹂躪した。』だが、云ひも終らぬ中に、忽ちナポレオンの爪はまた鍊磨された機械のやうに腹の頑癬を搔き始めた。彼は寢臺から飛び降りると、床の上へべたりと腹を押しつけた。彼の寢衣の脊中に刺繍されたアフガニスタンの金の猛鳥は彼を鋭い爪で押しつけてゐた。と、見る間に、ナポレオンの口の下で、大理石の輝きは彼の苦悶の息のために曇つて來た。彼は

腹の下の床石が温まり始めると、新鮮な水を追ふ魚のやうに、また大理石の新らしい冷たさの上を這ひ廻つた。

丁度その時、鏡のやうな廻廊から立像を映して近寄つて来るルイザの桃色の寝衣姿を彼は見た。

彼は起き上がることが出来なかつた。何ぜんら、彼はまだ、ハプスブルグの娘、ルイザに腹の田虫を見せたことがなかつたから。ルイザは呆然として、皇帝ナポレオン。ボナパルトが射られた獣のやうに床の上に倒れてゐる姿を眺めてゐた。

『陛下、いかがなさいました。』

ボナパルトは自分の傍に蹲み込む妃の体温を身を感じた。

『ルイザ、お前は何にしに來た？』

『陛下のお部屋から、激しい呻きが聞えました。』

ルイザはナポレオンの兩脇に手をかけて起さうとした。ナポレオンは周章てて擴つた寝衣の襟

をかき合せると起き上つた。

『陛下、いかがなされたのでございます。』

『余は恐ろしい夢を見た。』

『マルメーゾンのジョセフィヌさまのお夢でございませう。』

『いや、余はモローの奴が生き返つた夢を見た。』

と、ナポレオンは云ひながら、執拗な痒さのためにまた全身を慄はせた。

『陛下、お寒いのでございませうか。』

『余は胸が痛むのだ。』

『侍醫をお呼びいたしませうか。』

『いや、余は暫くお前と一緒に眠れば良い。』

ナポレオンはルイザの肩に手をかけた。ルイザはナポレオンの腕から戦慄を噛み殺した強力い療擧を感じながら、二つの鑲のひきち切れた緞帳の方へ近寄つた。そこには常に良人の脱さなか

つた胴巻が蹴られたやうに垂れ落ちて縮んでゐた。絹の敷布は寢臺の上から掻き落されて、開いた緞帳の口から濕つた枕と一緒にみ出でゐた。

ナポレオンは寢臺に腰を降ろすとルイザの福やかな腰に片手をかけた。だが、彼は、今はハプスブルグの娘に自分の腹を隠し通した苦痛な時間が腹立たしくなつて來た。彼は腹部の醜い病態をルイザの眼前に晒したかつた。その高貴をもつて全ヨーロッパに鳴り響いたハプスブルグの女の頭上へ、彼は平民の病ひを堂々と押しつけてやりたい衝動を感じ出した。——余は一平民の息子である。余はフランスを征服した。余は伊太利を征服した。余は西班牙とプロシヤとオーストリアを征服した。余はロシアを蹂躪するであらう。余はイギリスと東洋を蹂躪する。見よ、ハプスブルグの娘——

ナポレオンはひき剣ぐやうに、寢衣の兩襟をかき擴げた。

ルイザの視線はナポレオンの腹部に落ちた。ナポレオンの腹は、猛鳥の爪の刺繍の中で、毛を落した犬のやうに汗を浮べて爛れてゐた。

『ルイザ、余と眠れ。』

だが、ルイザはナポレオンの權威に壓迫されてゐたと同様に、彼の腹の、その刺繍のやうな毒毒しい頑癬からも壓迫された。オーストリアの皇女、ハプスブルグの娘は、今初めて平民の醜さを眼前に見たのである。

ナポレオンは彼女の傍へ身を近づけた。ルイザは緞帳の裾を踏みながら、恐怖の眉を擧めて反り返つた。今はナポレオンは妻の表情から敵を感じた。彼は彼女の手首をとつて引き寄せた。

『寄れ、ルイザ。』

『陛下、侍醫をお呼びいたしませう。暫くお待ちなされませ。』

『寄れ。』

彼女は緞帳の襷に顔を突き當て、翻るやうに身を躍らせて、廣間の方へ馳け出した。ナポレオンは明らかに貴族の娘の侮蔑を見た。彼は彼の何者よりも高き自尊心を打ち碎かれた。彼は突つ立ち上ると、大理石の鏡面を片影のやうに迂つて行くハプスブルグの娘の後姿を睨んだ。

『ルイザ。』と彼は叫んだ。

彼女の青ざめた顔が裸像の彫刻の間から振り返つた。ナポレオンの爛々とした眼は緞帳の奥から輝いてゐた。すると、最早や彼女の足は慄へたまま動けなかつた。ナポレオンは寢衣の襟を擴げたままルイザの方へ進んでいつた。彼女はまたナポレオンの腹を見た。静まり返つた夜の宮殿の一隅から、薄紅の地圖のやうな怪物が口を開けて黙々と進んで來た。

『陛下、お待ちなされませ、陛下。』

彼女は空虚の空間を押しつけるやうに両手を上げた。

『陛下、暫くでございます。侍醫をお呼びいたします。』

ナポレオンは妃の腕を攫んだ。彼は黙つて寢臺の方へ引き返さうとした。

『陛下、お赦しなされませ。御無理をなされますと、私はウイーンへ歸ります。』

磨かれた大理石の三面鏡に包まれた光の中で、ナポレオンとルイザとは明暗を閃めかせつつ分裂し粘着した。争ふ色彩の尖影が、屈折しながら鏡面で衝激した。

『陛下、お氣が狂はせられたのでございます。陛下。お放しなされませ。』

しかし、ナポレオンの腕は彼女の首に絡まりついた。彼女の髪は金色の渦を巻いてきらきらと慄へてゐた。ナポレオンの惨忍性は、ルイザが藻掻けば藻掻くほど怒りと共に昂進した。彼は片手に彼女の頭髮を繩のやうに巻きつけた。——逃げよ。余はコルシカの平民の息子である。余はフランスの貴族を滅ぼした。余は全世界の貴族を滅ぼすであらう。逃げよ。ハプスブルグの女。余は高貴と若さを誇る汝の肉體に、平民の病みを植えてやるであらう。——

ルイザはナポレオンに引き摺られてよろめいた。二人の争ひは、トルコの香料の匂ひを馥郁と撒き散らしながら、寢臺の方へ近かづいて行つた。緞帳が閉められた。ペルシヤの鹿の模様は暫く緞帳の壁の上で、中から突き上げられる度毎に脹れ上つて揺れてゐた。

『陛下、お氣をお沈めなされませ。私はジョセフイヌさまへお告げ申すでございませう。』

緞帳の間から逞しい一本の手が延びると、床の上にはみ出てゐた枕を中へ引き摺り込んだ。

『陛下、今宵は静にお休みなされませ。陛下はお狂ひなされたのでございます。』

ペルシヤの鹿の模様は静まつた。彫刻の裸像はひとり圓柱の傍で光つた床の上の自身の姿を見詰めてゐた。すると、突然、緋の緞帳の裾から、桃色のルイザが、吹きつけられた花のやうに轉がり出した。裳裾が空宙で花開いた。緞帳は静まつた。ルイザは引き裂かれた寝衣の切れ口から露はな肩を出して倒れてゐた。彼女は暫く床の上から起き上らうとしなかつた。搔き亂された彼女の金髪は、波打つたまま大理石の床の上へ投げ出された。

彼女は漸く起き上ると、青ざめた頬を涙で濡らしながら歩き出した。彼女の長い裳裾は、彼女の苦痛な足跡を示しつつ緞帳の下から憂鬱に繰り出されて曳かれていつた。

ナポレオンの部屋の重々しい緞帳は、そのまま濕つた旗のやうに明方まで動かなかつた。

## 五

その翌日、ナポレオンは何者の反對をも切り抜けて露西亞遠征の決行を發表した。此の現象は、丁度彼がその前夜、彼自身の平民の腹の田虫をハプスブルグの娘に見せた失敗を、再び一時も早

く取り返さうとしてゐるかのやうに敏活であつた。殊に彼はルイザを嫁つてから、彼の皇帝の重きを與へた彼の最も得意とする外征の手腕を、まだ一度も彼女に見せたことがなかつた。

ナポレオン・ボナパルトの此の大遠征の規模策戦の雄大さは、彼の全生涯を通じて最も莊嚴華麗を極めてゐた。彼は國內の三十萬の青年に動員令に對する準備を命じた。更に健全な國內の壯丁九十萬人を國境と沿海戰の守備に充てた。なほその上に、彼はフランス本國から二十萬人を、ライン同盟國から十四萬七千人、伊太利から八萬人を、波蘭とプロシヤとオストリアから十一萬人、これに佛領各地から出さしめた軍隊を合せて七十萬人に、加ふるに豫備隊を合して總數百萬餘人の軍勢をドレスデンへ集中させた。さうして、ナポレオンは、彼の娘のごとき皇后ルイザを連れてパリーからドレスデンまで出て行つた。ドレスデンでは、ルイザの父オーストリア皇帝、プロシヤ皇帝、同盟各國の最高君主が一團となつて、百萬餘人の軍隊と共に彼ら二人の到着を  
出迎へた。

此の古今未曾有の莊嚴な大歓迎は、それは丁度、コルシカの平民ナポレオン・ボナパルトの腹の



田虫を見た一少女、ハブスブルグの娘、ルイザのその兩眼を眩惑せしめんとしてゐる必死の戯れのやうであつた。

かうして、ナポレオンは彼の大軍をいよいよフリーランドの大原野の中へ進軍させた。

六

ナポレオンの腹の上では、今や田虫の版圖は經六寸を越して擴つてゐた。その圭角をなくした圓やかな地圖の輪廓は、長閑な雲のやうに美妙的な線を張つて歪んでゐた。侵略された内部の皮膚は乾燥した白い細粉を全面に漲らせ、荒された茫茫たる砂漠のやうな色の中で、僅かに貧しい細毛が所どころ昔の激烈な争ひを物語りながら枯れかかつて生えてゐた。だが、その版圖の前線一圓に渡つては數千萬の田虫の列が紫色の塹壕を築いてゐた。塹壕の中には膿を浮べた分泌物が溜つてゐた。そこで田虫の群團は、鞭毛を振りながら、雜然と縦横に重なり合ひ、各々横に分裂しつつ二倍の群團となつて、脂の漲つた細毛の森林の中を食ひ破つていつた。

フリードランドの平原では、朝日が昇ると、ナポレオンの主力の大軍がニエメン河を横斷してロシアの陣營へ向つていつた。しかし、今や彼らは連戦連勝の榮光の頂點で、盡く彼らの過去に殺戮した血色のために氣が狂つてゐた。

ナポレオンは河岸の丘の上からそれらの軍兵を眺めてゐた。騎兵と歩兵と砲兵と、服色燦爛たる數十萬の狂人の大軍が林の中から、三色の雲となつて層々と進軍した。砲車の轍の連続は響を立てた河原のやうであつた。朝日に輝いた劍銃の波頭は空中に虹を撒いた。栗毛の馬の平原は狂人を載せてうねりながら、黒い地平線を造つて潮のやうに没落へと溢れていつた。

園

園

妹の部屋から醫者が出て來た。悪事をして來たやうな顔をして。彼は醫者の表情に注意するの  
が不快であつた。醫者は煙さうな鼻をしてゐた。鼻の穴が擴がると此の醫者は嘘をついてゐるの  
に定つてゐた。

「妹はどうです？」

「お變りはないやうです。」

——嘘だ——醫者は粗略に彼の手の脈を見た——見ても駄目だ。もう此の患者は優生學に殺さ  
れた。——

「血痰は？」

「今日はありません。」

醫者の眼鏡の金に果樹園の雪が映つた。プリズムから流れたスペクトルは弱まりながら壁の斑  
點の上へ折れてゐた。

「熱はひけてをりますね。」

「どちらが早いでせう？」

「何がです？」

「いや。」

彼は顔を赧らめた。が、逆に此の健康者の心へ戲弄つてみたくなつた。

「死ぬのがです。」

醫者は彼を見たまま口を歪めて黙つてゐた。

「妹の方が早いでせう？」

醫者は生まましく笑ひ出した。だが、兄と妹の肺臓が壁を經立てて腐つて行く。これは事實  
だ。二人はその病ひを死んだ兄から傳染された。

醫者は鼻の穴を擴げながら壁の獵銃を睨んで歸つて行つた。僧侶を呼べと云ふやうに急ぎながら。外では雪の上で黒い鳥が亂れてゐた。海岸の石の上で燈臺が光り出した。

彼は直ぐ自分の仕事をし續けた。彼の仕事は自分の死後の靈魂が木星の大赤點へ到着する時間の測定であつた。彼は靈魂が一秒二十五萬呎の速度を持つてゐることを信仰した。彼の此の信仰した恒數は空氣と死者の靈魂との磨擦から發する輝きの光度から計算された。だが、その自分の靈魂の發出する時日は目前に迫つてゐる。

彼は自分の靈魂が一直線に馳けるものとは思はなかつた。雲と空氣の濛氣差があつた。星雲と月と太陽の引力に屈折した。なほ三十箇の木星族の慧星が邪魔をした。今、彼の此の必死の遊戯を苦しめてゐるものは、木星を巡る九つの衛星に反應する靈魂の屈折率である。

『兄さん。』

隣室から妹の弱々しい聲がした。彼は黙つてボイルの法則にかぢりついた。

$$\dots\dots\dots \frac{P}{1+mt} = \frac{p_0}{1+m_0t} \dots\dots\dots$$

『兄さん。』

$$\dots\dots\dots \frac{1+Rp}{1+R_0p_0} = 1 \quad \frac{a}{r} = 1 \dots\dots\dots$$

『カーテンを開けてよ。』

『待て。』

$$\dots\dots\dots \frac{a}{r} 1-S - \frac{a}{r^2} dv = -dS \quad \left(\frac{a}{r}\right)^2 dr = adS \dots\dots\dots$$

『もうお日様が這入るでせう。』

彼は顔を上げた。太陽はぼやけながら灣の中へ浸り出した。ふと彼は一度地の上を歩いてみたくなつた。もう長らく彼は天界のことを考へた。今一度、窓口の葉を落した枯枝をへし折つて出て来る水々しい粘液を指さきに感じてみたい。だが、彼はベッドから降りると獵銃を取り上げた

銃身は掌の中でひやりとした。幻の中を逆様に一羽の鳥が落ちて來た。テリアがひらりと巖頭を飛び越えた。

彼は銃口を太陽に向けて狙つてみた。太陽は銃口の先で輝きながらきりきりと廻轉した。一個の思意が光線と等速度をもつて太陽に逆行した。一瞬、二十萬年の倒逆の歴史が銃口の先端へ集合した。

『撃てッ！』

銃口がばたりと落ちた。彼は敷布を攫んで咳き出した。一本の緑線が太陽から閃いた。彼は苦しさうに銃について果樹園の方を見た。林檎は間もなくあの枝を撓めるにちがひない。間もなく町子は地の上で處女を落すにちがひない。そして、彼は戀愛と童貞とを苦々しく輕蔑した。隣室からまた妹の聲が弱々しく聞えて來た。

『婆や。』

『婆や。』

## 二

沼の暗い阪道の上から鈴が鳴つた。町子の櫓だ！ 彼は暖爐の傍から立ち上つた。馬櫓の青い提灯が雪の中を揺れて來た。彼は頁を伏せて外へ出た。雪は彼の眉毛に降りかかった。果樹園の路へ降りるとテリアが波のやうに馳けて來た。彼は憂鬱に立ち停つて沼から下る青い提灯を眺めてゐた。

櫓は動き停つた。幌の中から町子の降りる姿が見えた。灣は彼女の後で黒々と静まつてゐた。彼は町子から眼を外らした。彼は町子と逢はねばならぬことを後悔した。

テリアは彼の腰に飛びつきながら頭の雪を擦りつけた。

町子は彼の前まで來ると立ち停つたが黙つてゐた。遠く埠頭で警備船が横様に凍つてゐた。

『風がなくていいわ。』

町子は垂れ下つた毛皮の首巻を肩へ投げた。空虚の櫓が港の方へ動き出した。

『どうしてこんな所に立つてらつしやるの。』

『あなたは、どこかへ行くんですか。』

『私、来てはいけなかつたの。』

彼は黙つて戸口の方へ歩いた。足の裏で雪が鳴つた。今町子に逢へば、また彼女と逢ひたくなるのは分つてゐた。町子は戸口の切石の上で雪を拂つてゐた。

『どうしてあんな所に立つてらつしたの？』

『あなたが來ると困ると思つたんです。』

『そんなに私か恐いの？』

『まアお這入りなさい。』

『私、歸つたつていいのよ。』

彼は家の中へ這入ると暖爐へ炭を投げ込んだ。町子は椅子に腰を降ろすと圓く蹲んだ彼の背中に手を乗せた。

『ね、私、手紙を昨日も書いたの。だけど、もう出すのがいやになつたの。』

『僕も昨日手紙を書いたんです。』

『まア。どんなお手紙、ね、教へてよ。下さらなかつたんでせう。』

彼の眼の横で町子の膝が喜ばしさうに動いてゐた。此の膝よ！ 悲しみとは何か。壓力の不足である。――

『あなたのお手紙、いいお手紙だつたんでせう。私、いやなお手紙嫌ひよ。幸福なお手紙がいいの。私、ちゃんとあなたのお手紙を了つてあるの。』

『もう炭はこれ位ゐでいいでせう？』

『ええ澤山。私、雪で顔がほてつて仕様がないわ。』

窓を眼がけて飛びつくテリアの爪音が外でした。雪が窓の敷居で凍つてゐた。彼は暖爐の傍へ椅子を引きよせた。

『あなた、悲しさうなお顔ね。』と町子は云つた。

彼は黙つて町子の顔を見た。電燈の光りを横に、彼女の顔は眉をひそめてゐた。

『どうなすつたの。』

『ロウ・スピリットです。』

『あまり考へるからよ。もつと、……私、毎日来てあげたつていいんだけど。』

『あなたは成るだけ自由に愉快にしてゐらつしやい。』

『まア。』

『いや、皮肉ぢやありません。僕はとても愉快になれないんだから、愉快ぢやなくてはいけません。一體、不愉快な顔が何の巧徳になるんです？』

『あなた、一寸、あの音は何んでせう。』

町子は恐わさうに首を立てた。

『テリアですよ。』

『さうかしら、私、此の頃何ににでもびくびくするのよ。どうしてかうなんでせうね？』

『あまり愉快すぎるんでせう。』

『まア。』

『さう云ふものですよ。女の人が愉快な時は、一寸變つたことがあつても非常に恐く思ふんです。』

『あなたはちつとも私の心持ちを御存知ないんだわ。私、愉快なことつてちつともなくつてよ。』

『そりやいけない。』

『だつて、さうぢやありませんか。』

『あなたはいくらだつて愉快になれる。』

『あなた、そんなに起きてゐらしつていいの？』

悪い、と彼は思つた。だが、今寢てはなほ悪い。――

『あなたは僕の所へそんなに来てゐたつていいんですか。』

彼女は暖爐の火へ眼を落した。彼女の母が彼女を食ひとめてゐるのは分つてゐた。彼は胸を突

がれた町子の胸の騒ぎを感じたいとは思はなかつた。だが、何もかも今暫くだ。

『あなたは誰かに結婚を迫られてゐるんぢやありませんか。』

『どうしてそんなことを仰言るの？』

『いや、たださう思つただけなんです。』

『どうして分つて？』

『あなたの思つてゐることなら、大抵僕には分ります。』

『でも私、謝絶つたのよ。』

だが、いづれ謝絶出来ないときが来るだらう。次には、處女を落す祝賀である。次に子供だ。彼は壁にかかつた黒々とした天體の圖に眼を向けた。

『私、今夜はもつと面白いお話を聞きたかつたの。』

『あなたにはどんな話が面白いんです？』

『私、あなたがきつと私をいやうにして下さると思つてゐましたの。』

『どうして？』

『あなたは御存知ぢやありませんか。』

『あなたは僕が毎日何を考へてゐるのか知つてゐるんですか。』

『ええ。知つてますわ。』

『僕はね町子さん。云つてみれば、あなたが毎日何を考へてゐらつしやるのかとそればかり考へてゐたんです。』

『私もさうよ。』

『だけど僕は、あなたのことを考へるのがもういやなんです。殊に此の頃はなほいやです。』

『ぢや來なければ良かつたのね。』

町子は顎をふくらませた。愛の反語を間違へたのだ。だが、彼はもう饒舌りたくはなかつた。だが、今饒舌らなければ、一つの誤解を残して死ぬにちがひない。だが、愛しながら愛してはならぬとなるといづれ一つの誤解は残るだらう。しかし、愛とは何か。時には反語を説明する努力



である。――

八八

『何ぜあなたに逢ふのがいやかと云ふと、町子さん、さう怒つてはいけません。僕はこんな説明をするのももういやなんです。僕の病氣は人を愛してはいけません。』  
『もう分つてゐますわ。』

『僕は話が自分の病氣に觸れて來るといつも後がたまらないんです。もう何千回同じことを考へたか。いくら考へたつていつも考へる範圍は定つてゐるんです。第一あなたのこと、第二にまたあなたのこと、そして最後があなたのこと。僕はもうこれが苦痛だ。どうにもなりはしない。』

急に町子は彼の胸へ崩れて來た。あまり不意だ。彼は冷膽に彼女の首を見詰めてゐた。

『さア、立ち給へ。』

『いや、いや。』

町子の熱を含んだ身體が彼の胸の上で圓々と藻痒き出した。彼は彼女を元の姿勢に返さうとし

た。椅子が鳴つた。町子の身體はまた彼の胸へ跳ね返つて來た。

『君、傳染る！』

『いや、いや。』

『まア待ち給へ。』

突然、彼は片手で町子の絹の背中を抱いたまま悲しくなつた。何ぜ、死に行く胸へ處女の身體を投げつけるのか！ 悲劇ではない。嗤つてくれ。腕が慄へる、唇が唇へ。死が乗り移るのだ！

――彼は立ち上つた。櫛が落ちた。町子の口へ觸れやうとした彼の唇は結ばれたまま慄へてゐた。町子は涙で亂れた數本の頭髮を頬につけてうな垂れた。

嵐はやんだ。と彼は思つた。また一つの處女と童貞とは依然と平行線の上を馳けて行く。恐らく二線は交はることはないだらう。彼はその交はる無限の極の輻射點を考へた。もしも愛がそのときに生れるものであるならば、今は潔く死ぬが良い。肉體とは愛への二つの平行線の距離である。靈魂とは愛への輻射點への速力だ。――彼は平靜に返つて來た。彼は閉つた窓の鎧戸を開け

八九

た。凍つた雪の塊りが戸の上から落ちて來た。冷たい空氣が部屋の中へ流れ込んだ。黒い人影が果樹園の雪の中を歩いてゐた。彼は沼の上の空を見た。夜は盛り上つた雪の線の上で茫々としてゐた。彼は夜の高さを考へた。そして、自分の高さを考へて死を待つた。

『町子さん。あなたは僕にお伽話をきかしてくれなければいけません。僕は今はもう非常にあれが好きなんです。』

『私、寒くなりましたから御免なさいな。』

町子は首卷を肩へかけた。

『今夜はいつもより静かですね。櫓がちつとも通りませんよ。』

町子は黙つて寒さに身を慄はせた。彼は窓の明るみの太さに出て行く湯氣の擴がりを眺めてゐた。町子は櫓を拾つて頭へ刺した。

『あもう、私、もうこれから來ない方がいいんでせうか？』

彼は黙つてゐた。

『私、分らなくなりましたの。』

『僕にさう云ふことをきくのはいけませんね。』

『でも……………』

『お母さんの仰言つたやうになされば、それが一番いいと僕は思つてゐます。』

町子は暫く唇をひき締めて黙つてゐた。と、急に彼女は手に首卷を巻きつけて立ち上つた。

『あなたは怒つてらつしやるんですか。』と彼は云つた。

町子はドアの傍まで行くと彼の方を見た。眼が涙で光つてゐた。

『さやうなら。』

『町子さん、悪い意味にとつてはいけません。僕は決して悪いつもりで云つたのぢやありません。』

彼は町子の方へ近か寄つた。町子はドアの外へ出て行つた。彼は彼女の後を追はうとした。が、やめた。——生ける者を追つてはならぬ——彼はハンドルに片手をかけて町子の後姿を見送

つてゐた。

彼女は雪の中をうな垂れながら黒く橋道の方へ曲つて行つた。

——俺は愛してゐるんだ！

——俺は逢つてはならんだ！

——俺の肺は腐つて行く！

彼は入口の隙きから雪の上に倒れてゐる光線へ眼を落した。——誤解が一つ生と死の間へ落された。——だが、愛しないと云ふことが、常に、最も愛すると云ふことに變るのだ。それが愛の最高の理論である。——

彼は戸を閉めると力なく暖爐の前へ戻つて來た。

すると、ふと彼は亡兄の彫りつけていつたいつもの慘酷な壁の羅旬語が眼についた。

*Quis veni in horto nostra ?*

我らが園に入り來る者は誰ぞ、（と彼は讀んだ。）今、その毒園に押し籠められてゐる者は二人

である。二人は兄から病を傳染された。それに！彼は兄のその嘲笑的な壁の文字にまた新らし

く胸を突き刺された。彼は忘れてゐた憎惡を再び兄の靈魂へ向つて投げかけた。

『汝の選んだ者は、汝の弟と妹だ！』

彼は兄に飛びかかるやうにナイフを持つて壁へ自分の怨恨を彫りつけやうとした。だが、彼は自分達に傳染されて直ぐ次ぎに閉じ込められる者の心を考へた。——今に來る。今に此の壁と向つて日日同じことを考へる者があるにちがひない。そして、彼らは、臆て自分達のために殺されて行くにちがひない。——

彼はまた冷靜に落ちつき出した。彼はそれらの靜に後から來る選ばれた不幸な者達のために、ソクラテスの穩かな言葉を書き出した。自分の心をなだめるやうに。生前の智識を壁の上で兄と二人で競ひながら。

*Si mortem timeamus, semper aliqui terror nobis impendunt.*

彼は壁の兄と自分の言葉とを詳細に批較した。すると、兄の動詞の使用法が間違つてゐるのを

發見した。

『兄よ、お前の古典は永久に意味が通じないで済むだらう。俺はお前の嘲笑を黙殺する。』

三

雪は朝日に輝いてゐた。沼の彼方で銃が鳴つた。馬は朝日を割つて雪の上を馳けて來た。彼は微風を避けて家の前へ出た。彼は考へることが何もなくつた。心はほのぼのとしてゐた。灣の上では白帆が風を孕んでゐた。鷗は低く海流に戯れてゐた。漁場は眼下で賑はひ出した。一服の煙草が果樹園の方から匂つて來た。

『お早やうございます。』

『お早やうございます。』

健康な若者が朝の料理を運んで行つた。水々しい籠の若菜が窪んだ雪線の下へ鮮かに隠れていつた。

彼は壁の傍から道へ出た。一人の老人が道の真中に立ち停つて不思議さうに彼の家の方を見つめてゐた。ふと、彼は妹が家の中で黙つて死んでゐるやうな氣持ちがした。朝起きてからまだ彼は妹の容子を見なかつた。窓が閉つてゐる。彼は直ぐ家の方へ引き返した。郵便物が投げ込まれた。妹は隣室の壁の中で眠つてゐた。

『良し。』

彼は足音を忍ばせて窓を開けた。抜け毛が明るくなつた部屋の隅で浮き上つた。婆やが跣足をひきながら沼の方へ血痰を捨てに行くのが見えた。林檎の枯枝が寒く彼女の脊中の上で茂つてゐた。彼は瘦せた妹の部屋へ華やかなプリズムを持つて來た。(それから花を取り寄せやう。)少女の蒼ざめた寝顔の上で七色のスペクトルが花開いた。赤、橙、黄、緑。鼻は鋭い青藍色の雄蕊となつて高まつた。

妹は眼を醒した。醒めた此の造花は黙つて部屋の中を見廻した。

『兄さん、私、夕べ死ななくつて?』

彼は黙つて妹の顔を見た。——もう遠くはない！——

『誰だかコツコツ、コツコツ窓を叩くのよ。』

『本當かね？』

『ええ、そしたらお爺さんがゐて、私に、お前死んだんだつて云ふのよ。私、死にやしないつて云ふのに、死んだんだ死んだんだつて云ふの。』

『夢を見たんだよ。』

『さうかしら。』

『夢なんだよ。何んでもないよ。』

彼は自分の部屋へ戻つて來た。

『あれは危い。もう駄目だ！』

しかし、彼はもう何事も考へたくはなかつた。

『何んでもないんだ。何んでもないんだ。』

一つの彼の小さな頭腦の組織の中を、十三萬の宇宙の大群が悠々と靜かな魚城のやうに廻轉した。その大宇宙の極みは何處にあるのか？ そのまた大宇宙の極みは何處にあるのか？ 彼は涙がにじんで來た。

『神よ、御名を明し給へ！』

テリアはひとり斷崖の上で跳ねてゐた。燈臺のガラスの光りが彼の眼を貫いた。彼は郵便物を持つて沼の方へ行かうとした。すると、老人はまだ彼の家の方を鳥のやうに眺めて立つてゐた。

彼が近づくと老人は不意に笑ひ出した

『あれは刑務所でございますか。』

狂人だ。嶄新な生活が始つてゐる。遠く子供の歡聲が窪地の雪の中から上つて來た。赤い船が半島の横へ現れた。

彼は郵便物の一つを切つた。都會の變名したKからだ。Kは彼の親しいソーシヤリストである。

— Hは投獄された。

— Tはロシヤへ逃亡した。

— Sは行衛不明。

— Mは死亡。

— Uは殺された。

彼は手紙を懐へ押し込んだ。周章てるな。俺の料理されるのも、もう直ぐだ！ 何んでもない、何んでもない。

沼は雪の中で静まつてゐた。枯れ折れた蘆の間から數本の芽が鋭く空を狙つてゐた。一羽の鳥が静に雪の上へ降りた。婆やが壺を抱いて水際から登つて來た。

『お早やうございます。もう御飯の用意は出來てをりますでございます。』  
『ああ。』

彼は湯氣の立つた爽々しい朝の食卓の前で、健康さうに今は靜かに箸を取つてみたくなつた。

婆やはまた啖壺を抱きながら跣足をひいて雪の坂路を下つていつた。

四

月蝕の夜が廻つて來た。婦女の月經が亂れて來た。濱に打ち寄せる波足が狂ひ出した。その夜、彼の妹の靈魂が速力を出し始めた。

『兄さん、兄さん。』

『ここにあるぞ！』

『兄さん。』

『よしッ、ここだ。』

『兄さん……』

『兄さん……』

『兄さん……』

街  
の  
底

その街角には靴屋があつた。家の中は壁から床まで黒靴で詰つてゐた。その重い扉のやうな黒靴の壁の中では娘がいつも萎れてゐた。その横は時計屋で、時計が模様のやうに繁つてゐた。またその横の卵屋では、無数の卵の泡の中で兀げた老爺が頭に手拭を乗せて坐つてゐた。その横は瀬戸物屋だ。冷膽な醫院のやうな白さの中でこれは又若々しい主婦が生き生きと皿の柱を蹴飛ばしさうだ。

その横は花屋である。花屋の娘は花よりも穢れてゐた。だが、その花の中から時々馬鹿げた小僧の顔がうつとりと現れる。その横の洋服屋では首のない人間がぶらりと下がり、主人は貧血の指先で耳を掘りながら向ひの理亭の匂ひを嗅いでゐた。その横には鎧のやうな本屋が口を開けてゐた。本屋の横には呉服屋が竝んでゐる。その暗い海底のやうなメリンスの山の隅では瘦せた妊婦が青ざめた鏝のやうに眼を光らせて沈んでゐた。

その横は女學校の門である。午後の三時になると彩色された處女の波が溢れ出した。その横は風呂屋である。こゝではガラスの中で人魚が湯だりながら新鮮な裸體を板の上へ投げ出してゐた。その横は果物屋だ。息子はベタルを踏み馴らした逞しい片足で果物を蹴つてゐた。果物屋の横には外科醫があつた。そこの白い窓では腫れ上つた首が氣障るさうに成熟してゐるのが常だつた。彼はこれらの店々の前を黙つて通り、毎日その裏の青い丘の上へ登つていつた。丘は街の三條の直線に押し包まれた圓錐形の濃密な草原で、氣流に従つて草は柔かに曲つてゐた。彼はこの草の中で光に打たれ、街々の望色から希望を吸ひ込まふとして動かなかつた。

彼は働くことが出来なかつた。働くに適した思考力は彼の頭腦を痛めるのだ。それ故彼は食ふことが出来なかつた。彼はただ無爲の貴さを日毎の此の丘の上で習はねばならなかつた。ここでは街々の客觀物は彼の二つの視野の中で競争した。

北方の高臺には廣々とした貴族の邸宅が竝んでゐた。そこでは最も風と光りが自由に出入を赦された。時には顯官や淑女がその邸宅の石門に與へる自身の重力を考へながら自働車を駈け込ま



せた。時には華やかな踊子達が花束のやうに詰め込まれて贈られた。時には磨かれたシルクハットが、時には鳥のやうなフロックが。しかし、彼は何事も考へはしなかつた。

彼は南方の狭い谷底のやうな街を見下ろした。そこでは吐き出された炭酸瓦斯が氣壓を造り、塵埃を吹き込む東風とチブスと工廠の煙ばかりが自由であつた。そこには植物がなかつた。集るものは瓦と黴菌と空壕と、市場の賣れ残つた品物と労働者と賣春婦と鼠とだ。

『俺は何事を考へねばならぬのか。』と彼は考へた。

「彼は十錢の金が欲しいのだ。それさへあれば、彼は一日何事も考へなくて済むのである。考へなければ彼の病は癒るのだ。動けば彼の腹は空き始めた。腹が空けば一日十錢では不足である。そこで、彼は蒼ざめた顔をして保護色を求める虫のやうに、一日丘の青草の中へ坐つてゐた。日が暮れかかると彼は丘を降りて街の中へ這入つて行つた。時には彼は工廠の門から疲勞の風のやうに雪崩れて来る青黒い職工達の群れに包まれて押し流された。彼らは長蛇を造つて連らなつて来るにも拘らず、葬列のやうに俯向いて靜々と低い街の中を流れていつた。

時々彼は空腹な彼らの一團に包まれたままこつそりと肉飯屋へ入つた。そこの調理場では、皮をひき剝かれた豚と牛の頭が眠つた支那人の首のやうに轉んでゐた。職工達は狭い机の前につらりと連んで黙つてゐた。だが、盛り飯の廻りが遅れると彼らは箸で茶碗を叩き出した。湯氣が満ちると、彼らの顔は赤くなつて伸縮した。

牛の頭で腹を満たすと彼は十錢を投げ出してひとり露路裏の自分の家へ歸つて來た。彼は他人の家の表の三疊を借りてゐた。部屋にはトゲの刺さる傾いた柱がある。壁は焼けた竈のやうで、雨の描いた地圖の上に蠅の糞が點々と着いてゐた。そこで彼は、柱にもたれながら紙屑を足で押し除け、うすぼんやりと自殺の光景を考へるのだ。外では子供達が垣を揺すつて動物園の眞似をしてゐた。狭い路を按摩が呼びながら歩いて來る。子供達は按摩の後からぞろぞろついてまた按摩の眞似をし始める。彼は横に轉がつて靜かになつた外を見ると、向ひの破れた裏扉の隙きから脹れた乳房が一房見えた。それはいつも定つて横はつてゐる青ざめた病人の乳房であつた。彼が部屋へ歸つて親しめる唯一のものはその不行儀な乳房である。その乳房は肉親のやうに見えた。

彼はその女の顔を一度見たひと願ひ出した。が、いつ見ても乳房は破れた扉の隙間いつばいに垂れ擴がつて動かなかつた。いつまでもそれを見てゐると、彼の世界はただ擴大された乳房ばかりとなつて薄明が迫つて来る。やがて乳房の山は電光の照明に應じて空間に絢爛な線を引き垂れ、重々しい重量を示しながら崩れた砲塔のやうに影像を蓄へてのめり出した。

彼は夜になると家を出た。掃溜のやうな窪んだ表の街も夜になると祭りのやうに輝いた。その低い屋根の下には露店が続き、軽い玩具や金物が溢れ返つて光つてゐた。群集は高い街々の圓錐の縁から下つて來て集まつた。彼はきよきよしながら新鮮な空気を吸ひに泥溝の岸に擴つてゐる露店の青物市場へ行くのである。そこでは時ならぬ菜園がアセチリンの光りを吸ひながら、青々と街底の道路の上で開いてゐた。水を打たれた青菜の列が畑のやうに連なつて、青い微風の源のやうに絶えずそよそよと冷たい匂ひを群集の中へ流し込んだ。

彼は漸く浮き上つた心を靜に愛しながら、筵の上に積つてゐる銅貨の山を親しげに覗くのだ。そのべたべたと押し重なつた鈍重な銅色の體積から奇怪な塔のやうな氣品を彼は感じた。またそ

の市街の底で靜つてゐる銅貨の力學的な體積は、それを中心に擴がつてゐる街々の壯大な圓錐の傾斜線を一心に支へてゐる釘のやうに見え始めた。

『さうだ。その釘を引き抜いて！』

彼はばらばらに碎けて横たはつてゐる市街の幻想を感じると満足してまた人々の肩の中へ這入つていつた。しかし、彼は人々の體臭の中で、何ぜともなく不意に悲しさに壓倒されて立ち停つた。それは鈍つた鉛の切斷面のやうにきらりと一瞬生活の悲しさが光るのだ。だが、忽ち彼はにやりと笑つて歩き出した。彼は空壕の積つた倉庫の間を通つて歸つて來るとそのまま布團の中へもぐり込んで圓くなつた。

彼は雑誌を三冊賣れば十錢の金になることを知つてゐた。此の法則を知つてゐる限り、彼は生活の恐怖を感じなかつた。或る日彼はその三冊の雑誌を賣つて得た金を握りながら表へ出やうとした。すると、戸口へ盲目の見馴れぬ汚い老婆がひとり素足で立つてゐた。彼女は手にタワシを下げ、しきりに彼に頭を下げながら哀願した。

『私は七十にもなりまして、連れ合ひも七十で死んで了ひまして、息子も一人居りましたが死んで了ひました。乞食をしますと警察が赦してくれませんし、どうぞ一つ此のタワシをお買ひなすつて下さいませ。私は金を持つてをりましたが、連れ合ひの葬式が十八圓もかかりましてもう一文もございません。どうぞ此のタワシをお買ひ下さいませ。宿料を一晚に三十八錢もとられますので、それだけ戴けないとどうすることも出来ません。どうぞ一つこれをお買ひなすつて下さいませ。』

彼はその十錢の金を老婆の乾いた手に握らせて外へ出て行つた。彼は青い丘の草の中へ坐りに行くのである。

『生活とは、』――

彼は何事を考へても頭が痛むのだ。彼は黙つて了つた。彼は晴れた通りへ立つた。街は彼を中心にして展開した。その街角には靴屋があつた。靴屋の娘は靴の中で黙つてゐた。その横は幾何學的な時計屋だ。無数の稜の時計の中で、動いてゐる時計は三時であつた。彼は女學校の前で立

ち停つた。華やかな處女の波が校門から彼を眼がけて溢れ出した。彼は急流に洗はれた枕のやうに突き立つて眺めてゐた。處女の波は彼の胸の前で二つに割れると、揺らめく花園のやうに駭蕩として流れていつた。

慄へる薔薇

一  
彼と妻とはもう長らく結婚した當時の汚い家に住んでゐた。周囲の立て籠んだ薄い板壁の家々も彼の家と同様に寒さうに傾いてゐた。

彼は貧しい畫家であつた。彼らは結婚してから六年の間何の變化も起らなかつた。また彼は何の變化も望まなかつた。たゞ彼はかうして立てば必ず家々の冷たい瓦ばかりを見てゐなければならぬその家が嫌ひであつた。どこか汚くともよい陽のよく當る自由に廣々と空を見ることの出来る家が欲しかつた。

彼の妻は此の頃よく良人の姿をしげしげと見る事が多くなつて來た。見る度に良人の姿は何ぞだかいつも淋しさうに萎れて見えた。前には彼女の良人はさうでもなかつた。貧しさは今とてさして前とは變つてゐなかつた。が、貧しい中でもその頃良人はどこかに若々しい元氣があつ

た。『それに今は？』さう思ふと妻は急に夕暮れに迫られたやうな不安な淋しさを感じて來た。

## 二

或る日、妻は卓子の上の薔薇を寫生してゐる良人の横顔を眺めてみた。と、彼女は、『あら。』と聲を立てかけた。

別に驚くこともない。ただ良人の顎の先端に生えてゐた髭が、少し眼立つて延びてゐたのに過ぎなかつた。だが、彼女にはそれが非常に淋しく見えた。

『まア、もうあんなに濃くなつて！』

彼女はどうかして良人をいま一度昔の若々しい良人の姿にしてみたくなつて來た。そこで、

『ね、あなた。』と彼女は良人に呼びかけた。

良人は薔薇の花を見詰めたまま黙つてゐた。薔薇は埃りの積つた壺の中で、一輪、きりりと眞赤に咲いてゐた。

『ね、』と彼女はもう一度云ひかけた。が、かう云ふ仕事の最中に無理に話しかけては直ぐ不機嫌になる良人の性質を思ひ出した。で、良人の手のすいた時を待つ代りに彼女は剃刀と石鹼とを出して来てをいた。

『あらあら、もうタオルが皆汚なくなつて。』と彼女は何心なく呟いた。  
すると、良人は、

『何に?』と云つて急に妻の方を振り向いた。

『いえ、タオルがね、もう皆汚なくなつて了ひましたの。』

『タオルか、買つて来ようね。』と良人は優しく云つた。

妻には良人が何ぜそんなにも不意に大きな聲を出して訊いたのか分らなかつた。

『どうなすつたの?』

『何んだ?』

『今お手がすきましたの?』

『手なら、いつでもすいてる。』さう良人は云ふと畫筆を捨てて部屋の中を歩き出した。

良人にとつて、手のすいてゐると云ふことは、とにかく侮辱であること位い彼女とても知つてゐた。

『お顔をお剃りにならない?』

『顔か。』

『髭がそれは延びてゐましてよ。』

『剃つてもいいが、今更剃つても始らないね。』

『でも、お剃りになるといいわ。』

『何んだか、計畫でもありさうだね。』と良人は笑ひながら云つて妻の顔を見た。

『どうして?』と妻は訊き返した。が、彼女の顔は急に赤味を帯んで来た。

『どうも、少し拗こすぎる。』

『あら、あんなことを仰言るわ。さう云へば、あなただつて少し變よ。』と妻は云つた。

『俺が？』

『ええ。』

『何が變だ？』

『今日はいつもより、お優しいわ。』

『さうかね。』

『ええ、いつもそんなだと、随分いいと思ひますわ。』

『所が、いつもと同じなんだがね。』

『ちがひますわ。今日はきつとどうかしてらつしやつてよ。』

『さうかね。』

『さうかねつて、そんなに優しくなる理由がおありになるの？』

『あるね。』と良人は云ふと、ただ澄して妻を見た。

妻は一寸心を突かれたやうに身が緊つた。何か良人には自分とは何の関係もない喜ばしいこと

がありさうに思はれた。

『どんなこと？』と彼女は眼を見張つて訊いた。

『さうだね、何だが分らないが、ありさうな氣がするんだ。』

『それぢやつまらないわ。』

『つまり、だから有るわけだね。』

『誤魔化しちや、いや。』と妻は云つた。

『いや、そんな氣がするから、そんな氣も有ると云ふだけなんだ。別に誤魔化さうと思つたつて誤魔化すほどの問題ぢやないぢやないか。』

『でも、はつきり云つて下さいな。私、何んだか心配になつて來たの。』

『はつきり云へないんだよ。云へるほどはつきりした理由は、まアないと云つてもいいね。だから、まアないと云へるね。』

妻は氣がいらいらして來ると、

『ぢや、ある方が本當なの、ない方が本當なの？』と訊いてみた。  
『どちらも本當だよ。』

何か良人は隠してゐると妻は思った。

『そんなことは、あり得ないぢやありませんか。』

『なかなか、むづかしい言葉を使ふね。』と良人は云つて笑ひ出した。

妻は娘のやうに一寸手で顔を隠す眞似をして、

『早く顔をお剃りなさいよ。』とせき立てた。

『顔も顔だが、とにかくこんな生活ではね。』

良人は剃刀の方を見やうともしなかつた。が、妻には良人の優しかつた理由が初めて飲み込めたやうに思はれた。良人はいつもの我ままから黙つてはゐたものの、此の打ち續いた貧しい生活の中へ自分を置いてゐなければならぬと云ふ積み重なつた同情の重みから、ふと自然に愛情が首を擽げたにちがいないと妻は思った。

『こんな生活が、もう面白くないと仰言るの？』

『面白い筈がない。』と良人はきつぱりと云つた。

『私、それがいやなの。』

『いやだから、なほいやなんだ。』

『いやいや、そんないやな考へ方をなさると私、いやよ。』

妻は悲しさうに顔を曇らせた。

『だつて、いやだ。』

『私ね、私、あなたに生活がいやだなんて云はれると、つらくなるの。食乏してゐたつていいわ。私、今程の貧乏なら、どんなに有難いか分らないわ。食べていけるんですもの。それに私、あなたに今以上に出世をしていただきたいなんて、ちつとも思つてやしないんですもの。』

『本氣でそんなことを云つてるんか？』と良人は訊いた。

『ええ、何ぜ？』



『俺はお前にそんなことを本気で思はせてゐるのだと思ふと、なほいやだ。』  
『どうして?』と妻は訊いた。

妻には自分の怒りたいのを代つて怒り出したかのやうなその暴い良人の言葉の出方が分らなかつた。

『俺はもうお前から、出世をしない男だと見限られてゐる男なんだ。』

『また、さう云ふいやな考へやうをなさるのね。』

『俺はもうひねくれてゐるんだね、とにかく、かう云ふときになると、定つて不愉快な方へ考へて行く。どうも困つたものだ。』と良人はまた靜に云つた。

『だから私、云つてるのよ。私、ちつともあなたをそんな馬鹿な方だとは思つてやしないのよ。あなたは不遇な人なんだわ。だから私、私のやうなものがお傍にゐるので、それでなほあなたに濟まない氣がしてゐますのよ。』

『うまい。』と良人は一口云ふと疊の上へ寝轉んだ。

『何が?』

『お前は俺が貧乏をさせたものだから、俺を慰めるのに大分うまくなつた。』

『また!』妻はもうあきれたと云ふ顔をした。

『さうぢやないか。うまいよ、うまいよ。だから、俺はうまく慰められて、いい氣になつて了ふんだ。なかなか、お前はうまい。』

『いやな方ね、あなたは。』

『實際だ。』

『何を云つても駄目ね。あなたは。』

『何が駄目なもんか。俺はいい氣になつて、なほ貧乏を續けて行つてるぢやないか。俺は此の貧乏が至つて樂なんだ。こんな樂なことを續けさせてくれるのも、つまりお前だよ。』

『皮肉をいつてらつしやるのね。』

『馬鹿な。』

妻は何か云はふとしたが黙つて了つた。良人がさう云ふ風に貧乏にこだはつて理屈を云ひ出すときりのないのを知つてゐた。それがなほ彼女には淋しかった。事實、彼女には良人の性格として自分がゐなければ良人はさう貧乏を苦にする性質とも思へなかつた。ただ自分のゐるためばかりに良人は貧乏を氣にし始めたのだと思ふと、それがまたなほ彼女の心を落ちつかせなくなつて來た。彼女は良人の想像してゐるそれほど、自分が自分達二人の生活の貧しさを氣にしてゐるのではないと云ふことを、どうかして良人に知らせたかつた。ただ今少し生活が富裕であれば良人の氣苦勞をなくせるにちがいないと思ふ配慮からばかりのために、自分は自分達の生活の豊かになることを望んでゐると云ふことも知らせたかつた。だが、さうかと云つて、その生活を豊かにせんがために良人をあくせくと無理にも働かせる氣は起らなかつた。

『ね、石鹼と剃刀とを縁側へ出して置きましたのよ。』と妻は云つた。

良人は黙つてゐた。

『おいやなら、此の次になさるといわ。』

『うるさいね。』と良人は一口言つた。

『だから、おいやだつたら、もうよして此の次にして下さいな。』

『髭がうるさいと云ふんだ。すると、つまり、剃るのもうるさいと云ふことになるかな。すると、貧乏髭と云ふ奴になるんだね。すると、こいつは一寸よく似合ふなア。』

『何を云つてらつしやるの？』

『いや、貧乏髭の話さ。』

妻にはもう良人の事々に貧乏と云ひたがるそのひねくれが不愉快になつて來た。

『あなたは、どうして貧乏貧乏つて仰言るの？』と妻は良人を睥んで云つた。

『さうだね。一度云へば、それだけ貧乏が逃げて行くやうに思ふんだ。』

『あなたの仰言るお氣持ちは、よく私に分つてよ。』

『どう云ふんだ？』と良人は寝ながら妻の顔を仰いで訊いた。

『私に云ふ當てつけよ。』

『そりや、さうさ。』

『まア。』と妻は云つたまま口を閉めなかつた。

『そりや、さうだよ。』

『ぢや私、お暇を頂くわ。』

『そりや勝手だ。』

『いやなんですもの。私が貧乏をそんなにいやがつてゐると思つてらつしやつては、私、もう立つ瀬がないわ。』

良人はただ黙つて笑つてゐた。

『もつと私が貧乏をいやがると、あなたにいいのね。』

『うむ、その方が非常にいいな。』

『ぢや私、これからいやがつてよ。』

『暇を頂くのはどうした？』

『もうお暇を頂くのはやめたの。その代り、私、うんと貧乏をいやがるの。よくつて。』

『うむ。』

『有り難い話ね。もう私、貧乏はいいや。虐められてばつかりゐるんですもの。』

『すまないね。』

『すまないわ。いやよ貧乏は、貧乏なんかするもんぢやないわ。辛抱するといやがられるし、辛抱しないとお氣の毒だし。』

さう云ひながら妻は何か愉快さうに流し元の方へ立つていつた。

三

秋が深くなつて來た。彼は長らく望んでゐた郊外へ變つて來た。家の前には通りから玄關まで花に包まれた小路があつた。庭には薔薇や糸菊が芒の中に混つて咲いてゐた。葎畑はグリヤの花畑と竝んで明るく隣りの空地の方へ擴つてゐた。花畑の中には小さな一つの井戸があつた。朝な

朝な彼の庭には井戸を中心にして霧が立つた。夕暮れからは霧が野の方から流れて来た。

そこで彼は一つの謙遜な製作にとりかかった。それも矢張り薔薇であつた。一輪の薔薇が風もない静な庭の中で身を慄はせた。見ると一枚の花弁が草の葉の上に落ちてゐた。彼はその後の静な淋しさを畫きたかつた。一枚の花弁を失つた姿の花が俯向いて吹いてゐる。ただそれだけの單純な心境が彼を牽きつけたのだ。彼にはその薔薇の何の意味もない默然とした感興が、色彩の華やかなそれだけに淋しくて面白かつた。彼はその薔薇が出来上れば慄へる薔薇として或る小さな展覽會へ出すつもりであつた。彼の立つてゐる後ろの方では、妻がエプロンをかけたまま花畑の中で井戸の水を汲んでゐた。他家の白い敷羽の鶏は彼女の周囲で遊んでゐた。隣家の庭では掃き溜められた朽葉に火が點けられた。煙は竹藪に籠つて静に彼の庭の方へ流れて来た。草の實をつけた犬が垣根の中を擦り抜けて彼の傍へ馳けて来た。犬の疾走に跳ねられた白菊は暫く垣根の裾でひとり静に揺れてゐた。

## 四

彼の家の庭では無花果の木が眞先に葉を落した。それから葡萄の棚が明るくなつた。ダリヤは秋雨に腐つて来た。山茶花は鋸影の下で花を散らしてはまたいつのまにか咲いてゐた。小鳥は日毎に變つて葡萄棚に来てとまつた。さうして、秋はますます深くなると、庭の土に映る草の影が一層美しくなつて来た。彼の散歩はいつも自分の家の庭の中を一度丹念に廻つてみて、それから芒の群がつた廣々とした野の方へ歩いて行くことであつた。

さう云ふ或る日、彼のその静かな生活の中へ一通の手紙が来た。それは彼宛になつた未知の婦人から来た手紙であつた。中にはただ簡單に彼の「慄へる薔薇」から受けた感動が書いてあつた。しかし、彼にはさう云ふ社會的な反響があつたと云ふことは、それはいかに弱々しい聲であるとは云へ初めてのことであつた。間もなく、彼はある幽かな昂奮を感じてゐる自分に氣がついた。すると彼はさう云ふ自分が不愉快になつて来た。彼は妻には黙つてその手紙を懐へ隠すと、昂

奮を壓えるために白い小花で埋まつた小路の中を往つたり來たりし始めた。彼は歩きながら自分の昂奮の性質を考へた。それはその手紙が婦人から來たものであるからか、それとも手紙が社会的な一つの反響であつたと意識するためか、そのどちらに自分の昂奮が煽動されてゐるかを彼は考へた。彼は一度その手紙に眼を通したに過ぎなかつた。だが、その文字の一字一句の抑揚までが思ひ浮べる度毎に直ぐさま彼の頭の中に明瞭に呼び上げられるほどだつた。

『あなたの御高名は兼ね兼ねから受け給はつてをりました。だが、私はまだ一度もお眼にかかつたことはございません。それにこんな手紙を差し上げることをお赦し下さいませ。先日K會へ御出品なさいました「慄へる薔薇」からは近來にない感動を受けました。益々御精進のほどを願ひ申し上げます。やがては我國の畫壇に一つの大きな星が光り出すことと今から喜んでお待ち申してをります。』

彼は此の文面を幾度となく思ひ出してゐたときであつた。ふと彼は群がつた芒の中から一本の小さな茶の木の花を見附け出した。すると、彼は何ぜともなく自分の妻を思ひ出した。自分のた

めに長らく貧しく咲き続けやうとしてゐる憐れな妻の姿が。それは清らかな哀感を持つて憤ましく彼の心に匂つて來た。彼はその手紙に現れた婦人を妻のために自分の心から追ひ拂はふと努めてみた。彼は全力をもつて自分の妻を他の何者より高く捧げてみたかつた。すると、不意に彼はその手紙を妻が書いてゐる所を想像した。それはいかにもあの妻としては相應しい感じであつた。自分を勵ますために僞手紙を書いた妻、さう云ふ行爲をしなければならぬ妻を思ふと、彼はまた急にその手紙を妻が出したのではないかと思ひ出した。すると、彼はその手紙を妻に見せてやらうと云ふ氣になつた。譬へそれは妻が書いたものではなくても妻が書いたのだとこちらが思ひ込んでゐるやうに見せかけて、その手紙を妻に見せてやると云ふことは彼には面白くなつて來た。さうすることが白々しい下品な芝居のやうに思はれさうであるにも拘らず、それが今の靜な生活の中にある彼にはさうは思へなかつた。何となく愉快な爽やかな物珍らしい遊戯を見附け出したかのやうに活潑な感じが浮んで來た。

彼は家の中へ這入ると庭の枯葉を掃き寄せてゐる妻を呼んだ。

『これを見るがいい。』

妻は竹箒を脇にかかへたまま良人に渡された手紙を読んだ。読み終ると縁側に立つてゐる良人の顔を喜ばしさうに見上げて、『まア、ほんとに、』と彼女は云つた。が、良人は冷淡に黙つて彼女の顔を眺めてゐた。

『矢張りあの繪は誰でもいいと思ひますのね。私も近頃お書きになつたものの中で、一番いいと思ひましたわ。』

『それでどうだと云ふんだね。』良人は一層冷やかな顔をした。

彼女には良人が何ぞそんなに不服らしい顔をしてゐるのか分らなかつた。多分知らない婦人から來た手紙に自分が嫉妬を感じてゐるとでも思つてゐるのだと解釋した。

『私、お喜びを申し上げてゐるのよ。』

『嘘をつけ。』と良人は少し強い口調で云つた。

『あら、何ぞそんなことを仰言るの?』

彼女はもう良人のとげとげしい言葉がどう云ふ意味か判断が出来なくなつた。

『あなたは私の方から手紙が來たので、怒つてゐると思つてらしやるのね。』

『馬鹿な奴だ。』

『あら、だつて、もしそんなことをお思ひになつて、怒つてらつしやるんだつたら、そりや誤解よ。私、つまらないわ。』

『まだそんな生意氣なことを云つてゐる。』

良人の不機嫌さはいよいよ激しくなりさうだつた。

『おかしい方ね。どうしてそんなにお怒りになるの。私、ちつともそんないやなことを考へてゐるんぢやありませんわ。』

『お前は、嘘つきだ。』

『嘘なんか、私、嘘なんか、おかしい方ね。』と妻は云つたまま良人の顔を悲しげに眺めだした。『此の手紙はお前が書いたんだ。』

『あら！』

『隠したつて分つてるんだ。』

『まア！』

妻は意外の事に少し驚いた。が、さう良人から云はれて見ると、自分もさう云ふ風に名前を隠してソツと良人に手紙を書けば良かったと気がついた。

『お前のしさうなことだ。こんないたづらをして、俺が喜ぶとお前は思つてるんだらう。』

『だけど、そりや私ぢやないことよ。』と妻は初めて落ちついて云つた。

彼女は良人からその手紙の差出人が自分だと思はれてゐたのだと思ふと嬉しかった。

『字を見つて分るぢやありませんか。』

さう彼女は云はふと思つた。が、ふと彼女はその手紙の差出人が自分であると良人にいつまでも思ひ続けさせたい希望を感じ出した。と云ふよりも譬へ自分かもし本當にさうした手紙を書いて今のやうに良人から怒られたとしても、どんなにそのときは喜ばしいか分らないと思つた。いや、それより彼女は良人からそれほど貞淑な妻だと思はれてゐたのにも拘らず、どうして自分が今迄さう云ふ匿名の手紙を良人に書く美しい方法を忘れてゐたのかと、それが羞しくさへ思はれた。

『でも、あなたは御出世をなすつたんだわ。』

と、彼女は何心なく喜ばしさうに云つた。

すると、良人は急に顔を顰めて自分の部屋へ這入つていつた。

## 六

彼はひとり自分の部屋へ坐つてゐても妻の云つた言葉がいつまでも追つ駈けて來た。

『でも、あなたは御出世をなすつたんだわ。』

それは妻が侮辱のつもりで云つたのではないと云ふことは分つてゐた。だが、彼はその言葉を訊かされると同時に、何ぞか世の中から急に侮辱されたやうな恥しさを感じた。自分にはさう云ふ侮辱の方法がまだ一つ残されてゐたのだ。その最後の一つの侮辱ももう與へられて了つた。さう思ふと彼はもう人々の前へ自分の畫を晒すと云ふことが不快になつて來た。彼は今はその手紙からもう何の昂奮も喜びも感じなかつた。譬へその手紙が他の婦人から來たと明瞭に分つた今でも、彼はそれが自分の妻から來た慰めの手紙であつたならむしろ明るい氣持になれたにちがひないと思つた。それより彼は、さう云ふ手紙のために受けた自分の昂奮を思ひ出すと一層不愉快な氣持ちになつた。何となく自分の人間としての價値を判然と決定せられたかのやうに、然も今迄よりも一段と低く自分の人間としての價値を自分で見極めたやうな氣さへした。自分の畫いたあの「慄へる薔薇」は少くともさうではなかつた。あの「薔薇」は慄へた後にもなほ何の意味もなく黙然と咲いてゐた華やかな色の淋しさにその價値があつたのではないかと彼は思つた。彼はそ

の「薔薇」までが今はもう無價値なものに見えて來た。あの沈澱した靜物の氣品をひそかに見極めたと誇つてゐた自分の心眼さへ最早や彼は疑ひ出した。

彼は手紙を引裂くと庭へ降りた。彼はたゞもう前日までの靜かな氣持ちを取り戻したかつた。庭には妻の掃き寄せた枯葉が高く積つてゐた。薔薇はまた新らしい花をつけて草の中で咲いてゐた。白菊はもう朝毎の霜のために淡黄色く枯れかかつて地の上に倒れてゐた。彼はその傍で半ば土に埋もれた圓い一つの石を見附け出した。彼には今は何物よりその靜かに動かぬ石が心を牽いた。彼はその石を見詰めてゐると、街上で無數に跳ね廻つてゐる人々が新鮮に跳ねれば跳ねる程だんだん分裂しながら無生物に近づいてゐるやうに思はれ出した。さうしてそれとは全く反對に此の動かぬ石は、そのやうに靜かであればあるほど一途に深く澄み渡つてひとり新鮮に延びるべきものへ向つて延びてゐるやうな感じさへし始めた。彼はその石を明日から畫きたかつた。

彼は今の頼りない自分の淋しさを慰めるために枯葉へ火をつけてみやうとした。しかし、彼はマツチを持つてゐなかつた。彼は後ろを振り向いて妻にマツチを命じやうとすると、妻は縁側に



立つたまま良人の心理が今どこをさ迷ふてゐるかを見抜かうとしてゐるかのやうにちつと彼の後姿を見詰めてゐた。彼はその妻の眼が心配さうに光つてゐるのを見ると、

『マツチ。』と柔らかな聲で云つた。

『はい。』

忽ち妻の姿は茶の間の方へ消えていつた。が、また忽ち彼女の姿は現れた。

『お前ね、もう少し枯葉を掃き寄せて来てくれないか。』

彼は妻からマツチを受けとつて積つた枯葉に火を點けた。煙は枯葉の端から立ち昇つて霜枯れた花畑の上を緩やかに流れていつた。間もなく煙の中から妻の掃き寄せて来る枯葉の群れが、轉がりながら彼の傍へだんだんと近づいて來た。

彼は煙にとり包まれた妻のその柔順な姿を見てゐると何ぞかまた一層淋しさを感じ出した。

『おい。』と彼は妻を呼んだ。

『はい。』と妻は腰を延ばして彼の方を見た。

彼は何か一言妻に優しい言葉をかけたかつた。が、彼は何も云ふことが出来なかつた。そのまま妻の傍へ行つて彼女の手を持つと黙つて庭の隅の方へ歩き出した。そこには穂を白ませた一叢の芒が繁つてゐた。

『どうなさるの？』と妻は手をひかれながら彼に訊いた。

彼は返事をせずに芒の中へ腰を降ろした。枯葉が時々簾の方から落ちて來た。妻は彼の前に立つと少し羞しさうにして焚火の方へ眼を外向けた。

『坐らないか。』と彼は云つた。

妻は云はれるままに彼の傍へ小さく蹲むと彼の膝の上へ手を乗せた。

『もう春の花の種を撒いとかなくちやならないね。』

『さうですわね。』と妻は云つた。

『ひとつ罌粟を撒かうか。』

『罌粟も宜いけど、私、フリジャが好き。』

『スキートビーはどうだ。』

『良うございますわ。』

『菜の花は？』

『そしたら菜畑になつて了はなかつて？』

『ちやチュリップか。』

『良うございますわね。』

『チュリップとスキートビーと、フリジャと、それから、』

二人の花の話は芒の中でだんだんと賑やかになつていった。

無禮な街

街は祭りだ。樹のない崩れかかつた夜の街の兩側には、泥溝の傍まで露店の天幕が竝んでゐた。人波は汗ばんで甘い塵埃の匂ひがした。私は人々の顔をきよろきよろ見廻しながら歩いた。何を捜してゐたのか。逃げた妻がもし氣まぐれにでも流れ込んで来てゐたなら？ さう云ふ私の感じは人波にもまれたときのいつものことでは今に限つたことではない。何か他に。私は漠然と<sup>す</sup>掬摸を捜してゐたのだ。掬摸の顔と云ふものはどこかに面白味があるにちがひない。これこそ人間の代表的な顔だと思へるものは掬摸の仲間にありさうに思はれた。しかし、もう人々の身體に突きあたつて行くのはいやだ。私は街を外れた。人々は祭りにひきつけられてゐて露路裏は空虚だつた。細い新月が胴の歪んだ廂の上で蕭洒として光つてゐる。泥溝には油が浮いてゐた。私は空の烟筒を數へてみた。一本の烟筒は細々と烟を横に吐いてゐた。暗い露路を鋸形に幾つも曲つてもまだ月は追ひかけた。蒸しつく晩だ。猫が私の家の上で首を擡げて黙つてゐた。暗い中で水道栓が鳴つ

てゐる。塀板の上からは鉢の花薔薇が生き生きと覗いてゐた。

『一寸御覽なさいな。いいわね。私、此の薔薇に香水をかけてやるの。』

妻のゐたとき、妻はさう云つて或る夜その薔薇の鉢を快活に抱きかかへて歸つて來た。

私は家の中へ這入つた。忘れた。花<sup>スチートビー</sup>莢豆を買ふのであつた。私の汚い部屋の中にはいたる所の花瓶や花筒に花<sup>スチートビー</sup>莢豆が挿してある。その色とりどりの花々はあながち孤獨な純情の生活によりいささかの生氣を放たんがためばかりではなかつた。私は此のまる二年と云ふもの雌蓋の夜の眠りの研究に没頭して來た。妻は何ぞ逃げたのか。私にもよくは分らない。恐らく貧困のためであらう。それ以外のことを考へると云ふことは、とにかく考へ得られるにしてもあまりに自分の妻を見下げることだ。私は彼女を愛してゐる。何ぞか。愛してゐる。私が初めてスチートビーを買つて來たとき、妻は夜の寢衣に帯を締めかけてゐた所であつた。

『あら、まア、スチートビーね。スチートビーだわ。まア、綺麗だわねえ。』

彼女は私の持つてゐる花束を奪ひとると、ぱらりと帯を捨てて高く兩手でその花束をささげな

がら云つた。

『あなた、これ一寸スキートビーよ。まア、美しいわね。』

彼女は、直ぐ帯も締めずにふわふわとそのまま流しもとの水の傍へ飛んでいった。一束の花にも、それほど心を奪はれる彼女であつた。敏感と云ふことが、もし鈍感のやうに沈着に重々しいものであつたなら、私の生活は寔に萎れぬ一對の花のやうにいつまでも幸福であつたらう。

私は花瓶に水を入れ變へるとその杓で冷たい水を一口飲んだ。何もすまい。こぼれた花瓣もまだ昨日のままに散つてゐた。風情がある！ 私の慰めとは、これだ。逃げられた男の恍惚とは、逃げた妻の美しい習慣を忘れぬことだ。窓が閉まつてゐた。私は窓を開けて風を入れた。カーテンを買はねばならない。猫がひらりと何處かで飛び降りた。新月がひとり空に残つてゐる。

『笑ふべき現象だね。』と私は云つた。

とにかく誰に向つて云つたのかよく分らぬが、この蒸しつく窓から逃げられた男がひとり空を仰いでゐると云ふことは！ 黙つてゐるのに何ぞか私は瞬間と雖も黙つてはゐないやうに思はれ

る。私は家の中から何か新らしいものを発見しようとして部屋の隅々を眺め廻した。まだ見たこともない節穴や木目の形まで検べながら。しかし、それももううるさくなつた。私はバナナの皮を剥いて食べ出した。その匂ひがどこかの誰かの愛人の匂ひのやうにまことに物柔かで香氣があつて、と私は考へると淋しくなつた。

『果實！』

さう私は何ぜともなく呟いた。遠く祭りのざわめきが聞えて來た。彼らは何をするのか？ 何かに耳を敬てるやうにふと私は心をそのことに集中した。

『われわれは滅びて了ふ。』といきなり私は感じた。

私はバナナを食べた。悲しくもなければ淋しくもない。ここには何か分らぬ眞理が傲然としてゐるに相違ない。

『此れはバナナだ！』

夜が更けていつた。空氣が冷たく濕り出した。街の祭りのざわめきがだんだん低まつて來た。

私は、脱けた柱の釘を黄銅鑲の文鎮で打ちつけた。それから顕微鏡のレンズを脱して拭き始めた。夜の私の仕事はいつもそれから明け方まで續いて行く。ふとそのとき私は玄關から物音をききつけた。

誰かな？

妻かな？

風かな？

『どなた？』と私は云つた。

返事がない。

『どなた？』

私は玄關へ立つていつた。すると、見たこともない女が私に背中を向けて戸を締めてゐた。

『誰方ですか？』

女はこちらを向くと息をはずませて黙つてゐた。若い女だ。顔がひどく蒼ざめてゐて、彼女は

私の顔も見ずどこか私の周囲を見廻してゐた。何かに餘ほど脅びやかされてゐるらしかった。

『間違ひでせう？』と私は云つてみた。

女は私を見て一寸笑顔になつた。

『上がつてもよくつて？』

『どうぞ。』と私は云つた。

云ふや否や、女はもう下駄を脱ぎにかかつてゐた。左の頬に一つ眼に立つ黒子があつた。私は奥へ遣入つて座蒲團をすすめた。女は早やべたりと坐つてゐて自分で締めた後ろの襖の隙間を見詰めてゐた。私は何と云つてよいのか分らなかつた。何かの間違ひにちがいない。

『遅くなつて了つたわ。』と女は云つた。

『いや。』

『蒸しむしするのね。』

『どうかなすつたのですか？』

『あなた、ひとり？』

『ひとり者ですよ。』

『ア、血が。』と女は云つて私の手の指を指差した。

いつの間にか私の指からは釘を打ちつけたときの痛まぬ傷口から血が出てゐた。しかし、此の女は不思議にも馴々しい魅力があつた。女は袂から紙を出さうとして周章してゐた。

『いいんですよ。どうかなすつたんですか。』

『さうぢやないの。』と女は云つた。

何ぜさう云ふ風なことを云ふのであるか。私の疑ひ深さうな眼つきから考へて、私の考察を訂正しようとするかのやうだ。全く私に限らず彼女をひと眼見たものは、彼女のその態度から賤しい生活の匂ひを嗅ぎつけたにちがひない。しかし、私にはそんなことがらが私の眼の色を變へさせたそれほど何の重大なかかわりがあるものか。ただ私にとつて興味があつたと云ふことは、此の不意に飛び込んで來た女の得體の知れぬ馴々しい色彩が、とにかく一寸黒い花でも見るやうに

不安な魅力を感じたことだ。私は指の血を散つてゐたスキートビーの柔い花瓣で拭きとつた。女は壁に貼りつけてあるモナリザの版畫を眺めてゐた。その繪は妻が繪の中の女の微笑を見習ふためにわざわざ貼りつけたものである。

『あの繪、キリストさんのね。』と女は云つた。

思ふにこれは何處かでマリヤの繪でも見て來てそれをキリスト教の何かと關係があるらしい説教を誰かに聞いたものに相違なかつた。聖母とリザとを間違へる程度の見識で、なほ全然私の世界に無智ではないと云ふことを示したい彼女の願ひに私は好意を持たう。が、私は私のしかつめらしい鄭重な言葉が彼女が馴々しさに不似合な感じを持つて響いて行くのがいやであつた。これは私は夢想家だ！

『あの繪はマリヤさんのだ。』

『ア、さうさう。マリヤさんね。キリストさんはもつと恐い顔をしてるわね。』

『キリストさんは男だよ。』

女は何ぞだか『ふふ。』と笑つた。何ぜ私はさう云ふ可哀相なことを云ひ出したのか。しかし、女は私のその侮辱も私の言葉の汚い變化にもさして氣にする所がなかつた。私が慰めようとして優しい言葉を搜してゐる暇に、彼女は這入つた來た襖の方を振り向いてそわそわしく膝を動かしてゐた。しきりに戸の外が氣になるらしい。祭りの響は消えてゐた。女は誰かに追ひつめられて迷ひ込んで來たのにちがひない。私の家は露路裏の袋の底のどん底だ。もし逃げるなら此の窓を飛び越すより仕方がなかつた。

『誰か來るのかね？』

『私、歸りたくないの。』

どうして若い女がただ男ひとりの家の中へ飛び込んで來たのかまた私は知りたくなつた。前から私の家には若い男がひとりであると云ふことを彼女が知つて來たのか。それとも他の誰かの家へ來るつもりで偶然私の家へ這入つて來たのか、また私のゐない前に此の家には彼女の知り合ひの誰かがゐたのであるか、そのどちらであるかはつきりと知りたかつた。

『あなたは此の家へいつか來たことがあるのかね？』

『ええ、來たわ。』

『いつ？』

『一度、たつた一度きりよ。』

『僕のあるときに來たのかね？』

『あゝのときあなたゐたの？』

おかしい。これは私のゐる前に彼女が此の家へ來てそのとき彼女の知らない澤山の若者が集つてゐたのかも分らなかつた。

『僕はそのときゐなかつたんだよ。』

『さおう。松山さんも？』

『松山さんて知らないがね。』

『あなた知らないの。』

『君は僕が此の家へ這入る前の人のときに來たんぢやないのかね？』  
女は一寸驚いたらしく口を開けた。

『私、あなたを見たことがないわ。』

『そりやさうだらうとも。』

『ぢや私、間ちがつたんだわね。』

『さうだよ。僕はあなたなんか見たことがないよ。』

女は黙つて眉を動かした。が、直ぐ晴れやかに笑ひ出した。

『困つちやつたわ。』

『これから遠くまで歸るんですか？』

『ええ。さやうなら。』と女は突然云つて頭を下げた。

『君、外へ出ると困るんぢやないですか。困るのならここにゐたつていいんですよ。』

すると、女は歸りさうにもせず暫く黙つて部屋の中を見廻してゐた。どこかさう云ふときに限

つてぼんやりする顔だ。圓く全く思慮の缺けた愛すべき顔つきで、その物腰に飄々とした不安定な動きがあつた。

『もう幾時頃かしら。』と女は呟いた。

『十二時少し廻つてゐるね。』

『さうだわね。』

女の顔には落ちついた様子がみえた。すると、彼女の顔は遽に快活になり出した。

『あなた、花が好きなの？』と女は訊いた。

『いや。』

『澤山あるわね。』

『君は好きかぬ？』

『好きだわ。綺麗だわね。あの花もいいわ。直ぐ凋んで了はない？』

『凋むよ。』



『豌豆?』

『さう。』

女はまたくるくる部屋の中を見廻した。」

『あ蒸しつく。私、今頃から歸れない。』

よければ泊つて行くがいい、と私は云はうとした。が、一組より蒲團がない。暫く黙つてゐると、女は袂で顔を煽ぎながら、

『今夜ここにゐてもよくつて?』と云つた。

『いいとも、だけど君の寝る蒲團がないんだが。ア、さうだ借りて來う。』

『いいわ。私、寝ないわ。あなた、もう寝るんでせう。』

『いや、寝ない。僕は夜は寝ないんだから。さうだね、僕の蒲團で寝るといいよ。』

『どうして寝ないの?』

『僕の商賣は人と違ふんだから、晝寝て夜起きると云ふやつなんだから、いいよ。誰か來たら、

ゐないと云つてをけばいいんでせう?』

『さう云つてよ。』

女は煽ぐ袂を放して喜ばしさうな顔をした。矢張り何かが恐いのだ。

『泊めて、ね?』

『どうぞ。』と私は軽く云つた。

『ありがたいわ。』

女は片方の袂の中からチョコレートを取り出すと銀紙を剥き始めた。

『ここ變つたのね、前に來たときには支那人がゐたわ。』

『ははア。』

此の女はその支那人とも何か関係があつたにちがひない。男の家から家へと泊り渡つてゐる特殊の女らしかつた。それにしても一體何者が此の女を追つ駈けてゐるのだらう。それが私には問題となり出した。

『あなた、奥様があるの？』  
『あるやうに見えるかね？』  
『あんな鏡臺なんか贅澤だわ。』  
『家内はあつたんだよ。』  
『死んだの？』  
『死なない。』  
『ちや今はゐないのね。』  
『逃げたんだよ。』  
『ふーむ。』と女は不思議な顔をした。  
『興味があるかね。』  
『ひどいわね。』  
『君もさう思ふかね？』

『だつてひどい女だわ。』  
『さう云つてくれる者が一人ぐらゐ欲しいんだよ。』  
『いつ逃げたの？』  
『よほど興味があると見えるね。』  
『でも、あなたが可哀相だわ。』  
『良人を抛つたらかして逃げて行くなんて、面白くないね。』  
『あなた一人なら部屋が汚くなる筈だわ。』  
『そんなに汚いか。』  
『汚いつたらありやしない。』  
女は壘の上を吹いてみてゐた。  
『私、あとで掃除してあげてよ。こんなに塵埃がたまつてるんですもの。フツ、フツ。』  
『吹いちやいかんよ。』

『まあ随分ほこりがあつてよ。家も悪いんだわね。さらさらしてるぢやないの。これぢや風が吹いたらたまらないわ。』

私はすっかり忘れてゐた顕微鏡にレンズを入れた。

『何に、それ？』と女は訊きながら寄つて來た。

『知らないか？』

『蟲眼鏡？』

『さうだよ。』

『大きく見えるんだわね。』

『うむ、さうだよ。花を見るんだよ。こんなのが僕の商賣なんだ。面白いかね？』

『見せてよ。』

『一寸待つた。』

私は指の血を拭いたスキートビーの花弁を鏡盤の上に置いて度を強めた。

『さア見た。』

女は口を開けて顕微鏡の上へ顔を俯向けた。

『變だわね。』

『見えるかね。』

『何んだかぼやぼやしてゐるわ。』

『血が見えるだらう。』

『赤いのがさうなの？』

『白いのもさうだよ。雲のやうな形のものがあるでせう。』

『白いわね。』

『白いのも血だよ。』

女は黙つて顎を鏡の口の上で動かしてゐた。

『女の血を見ると、あの白い物の形が違ふんだよ。幾人男と面白いことをしたかつて云ふことだ』

つて、あの形でちゃんと分るんだよ。どの男とさう云ふことをしたつてことも勿論分るし、面白  
いかね？」

『怖いわね。』

女は顔を上げて私の顔を眺めてゐた。そのなげやりな表情には別に恐ろさうな所もなかつた。

『あのね、澤山な男と一緒になると子供が出来ないの？』と女は突然そんなことを訊き出した。  
どこかに何かを隠したやうな顔つきだ。

『そりや出来るさ。』

『出来ないつてゐたけど、嘘だわね。』

『そりや嘘だ。』

女は黙つて片方の膝を動かしながらチョコレートの紙をもみ出した。私はその女の血球を鏡盤  
に乗せてみたい興味があつた。私は前に一度妻の血球を験べて見ようとしたことがあつた。しか  
し、私は恐ろしくてやめた。疑ふと云ふことは、疑ふ可き価値があつても罪惡である、と私は考へ

た。總ての世の中の結婚にもし顕微鏡が必要となつたなら。(恐慌の後に平安が来るだらう、人々  
はその恐慌の時代に自分自身を置くことを嫌ふ。時代の動力は巧利である。少くとも時代自身は  
まだ見えない世代の犠牲となることが、明らかに進歩を來たすにちがひないと思はれる時に於て  
さへ、なほ彼らは犠牲の苦しみを厭ふ。)と私は考へた。

『君、眠けりや僕のつき合ひなんかしなくつて眠るがいいよ。僕は眠かないんだから。』

『さおう。』

『眠いでせう？』

『どこで眠るの？』

『向ふの部屋で寝る方がいいだらうね。どこで寝たつていいが。』

女は私の指差した次の三疊の部屋へ行かうとして立上ると、袂の中から残りのチョコレートを  
出して疊の上へ投げ出した。

『君は誰かに追つかけてられてゐるんぢやないか？』

女は振り向いて、

『何ぜ？ 嘘よ。』と云つた。

『どうもさうらしい。』

『そんなことはないわ。』

『そわそわしてゐる。僕には心配なんかしなくつていいよ。先刻から變だ。』

『私、赤ちゃんを捨てて來たの。』と女は平氣な顔をして云つた。私は一寸ショックを受けた。

『捨兒かい？』

『うるさいんですもの。』

『誰の子だ？』

『私の。』

『君の子を捨てたのか！』

『捨てちやつたのさ。』

女は赤い顔をして大膽に頬をふくらせた。

『そりやいかん！ いつだね？』

『さつき。』

『來る前だね？』

『ええ。』

『嘘ついてるんぢやないか？』

『あちらに蒲團があるの？』

『どこだ？』

『何に？』と女は訊いた。

『赤ちゃんをどこへ捨てたんだね？』

『八幡さんの中へ置いといたの。』

『坂の上の？』

『ええ。』

女は三疊の部屋へ這入らうとした所で、襖を縦に腹へあてながら口を鳴らしてゐた。

『早く拾つて來るといい。今ならいいよ。』

『うるさいわ。』と女は云つた。

『いがん。』

私は直ぐ外へ出ようとした。

『邪魔つけぢやないの。今頃拾はれて了つてるわよ。』

私は外へ出た。歩きながら、私は何ぞか嘘にひつかかつてゐるやうな気持ちがした。露路を出て泥溝の傍を通つていつた。しかし、嘘にしても拾兒をしたと云ふ嘘は嘘らしくない嘘であつた。あまり上手い。だが、もし本當だとすればいまま少し女の舉動に何かの愁ひがある筈であつた。それが無い。愁ひの代りにいくらかの恐怖はあつた。拾兒をして來た女が愁ひよりも恐怖を多く感じるに云ふことはあり得るとして、しかしそれでもどこかのんきな所に嘘だと思はす感じが残つ

た。無論それは拾兒をすると云ふことがあまり事件の性質として唐突的な變態的な所が多いためであるかもしれない。が、もし本當だとしても拾兒はもうそこにはゐないと云ふ感じがした。拾はれて了つたがためにゐないと思はれるのではなく、嘘らしい事件の性質がそんな風に思はせた。

祭りの跡では露天の天幕が疊まれてゐた。濁つたやうな夜氣の中で醉漢が跟ろめいてゐた。輓かれて行く植木屋の車の上では賣れ残りの花が慄へてゐた。私は人通りのなくなつた橋を渡つて女の云つた境内の方へ歩いていつた。が、ふと私は困つた。一體その拾兒を拾つて來て私はどうしようとするのか。兒を捨てようとして、さうして捨て得られた母親にその兒を再び強ひたとしてもその子も母も不幸であるのは分つてゐた。それかと云つて、私自身でその兒を育てて行く考への無い以上、私はその子を拾ひ上げたとしても仕方がない。それよりそのままにしてをけばやがてはその兒を拾ふであらう人達の誰よりも恐らく愛を持たない私やその母の手へその子が歸るより、われわれよりも子を欲するであらうそれらの人々の手へその子の落ちることこそは子に

とつてより幸ひな運命となりさうに思はれた。實際捨兒に出逢つた人々は凡そ私と同じ氣持になつて見捨てるものとして見た場合、もしその兒を拾つた人があつたとすればその人はなみ通常の人情家であらう筈はない。とにかく、その兒は早や母に捨てられたと云ふことに於て既に此の人生の出發點で不幸であつたのだ。しかし、それはまたいかにさやうであつたとしても私は今更引き返すことは出来なかつた。さう云ふ事實に今明瞭に出逢つたと云ふことが私に避く可らざるある責務を生じさせたのだ。既にそのことに何かを感じたと云ふことに於てだけさへもその兒の運命を見届けなければならぬと云ふ義務が生じてゐるやうに思はれた。なほその上にその兒の母を知つてゐるものがまさにその子の拾ひ手とならうとしてゐる私であるとして見れば、これはいよいよ複雑な問題とならねばならなかつた。ともかく私は私としてひとまづ何はさてをきその兒を母の愛に訴へて彼女に返す必要があつた。彼女がもしそこで知らないと言つたなら、私はその兒の母を全く知らないものとして誰か子を欲する適當な人々の申し出のあるまで出来得べくんば養つてやらうと考へた。しかし、それにしても何ぜ彼女は私にこのやうな重大な自身の秘密を輕

輕と打ち開けたのか。それが私には分らなくなつて來た。それは彼女本來の輕率な性質からだと思ふばかりに思つた場合すこぶる明瞭なことであつた。が、更にその他に何かがないか、何か子に對する愛情が。もしその秘密を打ち開けたとき相手の者が狼狽して此の私のやうにその子を拾ひに走るであらうと推察しての好奇心が彼女にあつたと思へば思はれないこともない。それは譬へまことに問題とはならぬ閃きのやうな些細なものであつたとしても、そのかけひきの氣持の動きからは争はれぬ子に對する彼女の愛情がちらりと覗いてゐるやうに思はれた。そこから、彼女を攻めかけて反省させればさせられる。いづれ他人の手より子にとつては母の手だ。もしそれでも彼女がその子をいやだと云へば私は云はう。

『私に知らさずに、もう一度捨てるがいい。』

それでも私はまだ彼女の嘘にひつかかつてゐるやうな氣持がした。私は教會堂の横を通つて坂を登つた。私はふと妻のことを思ひ出した。何ぜだが私はここを通る度にいつも必ず妻のことを思ひ出す。勿論そのあたりには私に妻を思ひ出さしめる何らの特種な現象もない筈なのに。何

かその空氣の中には確に、眼に見えぬ何かがあるに相違ない。八幡の境内はその坂の上にあつた。櫻が枝を垂れて繁つてゐた。私は低い石段を登り、鳥居を潜つて石疊の上を歩いていつた。周囲は森のやうに沈まつて暗く、樹の幹が時々立ち停つてゐる人のやうに見えた。すると拜殿の前に一人の黒い人影が鈍く靜に動いてゐた。私はその男らしい人影を見ると立ち停つた。もしその者も前に一度そこを通り過ぎたとき捨兒に逢つて、さうしてそのまま彼も見捨てて逃げ出したものの、またそれが心にかかつて舞ひ戻つて來たのではなからうか。實際、捨兒に逢つたものは譬へ全く拾ふ意志がないものにとつても長く氣にかかるにちがひない。私はその人の傍に近寄つて行つて捨兒のことを訊ねてみようかと思つた。が、訊ねて見て、捨兒があつたと答へられても見當らない限り仕方もなく、訊ねたと云ふことで、その捨兒と何かの關係がありさうに思はれると云ふことも不快であり、訊ねて知らないと言はれたときはまたその人に自分と同じ動搖を與へさうで氣の毒で、よしまた譬へ捨兒を知つてゐたとしても拾はなかつた限り知らなかつたと答へるにちがひはなく、が、しかし何かの方法で確に捨兒があつたと云ふことをその者から知りと

ることが出來たとすれば、私は私一個の感情の整理に役立つのだ。長らく此の後とてもその捨兒のことが氣にかからなければならぬと云ふことは私としては困つたことだ。で私はその人影の方へ近寄つて黙つてその者の舉動を觀察しようと考えた。私はもはや捨兒はこの境内にゐないと直感した。私はその兒を捜すことは第二として、その男の傍へだんだんと近づいた。するとその男は男の方から私の方へ近寄つて來た。片手を帯へ挟み、片手を懐へ入れてゐてどこかに萎れた様子が見えた。はて此の男、私がこの男を觀察しようとしてゐるやうに、此の男も同じ心理で私を嗅ぎつけようとしてゐるのではないか。私はその男の傍を擦れ擦れに通つて顔を見た。暗い顔の眞中からその男の眼がまた私の顔を覗き込んだ。疑ひ深さうなその眼の光りが私には不快であつた。さう云ふ光りの眼とはいつても私は争ひさうな氣持ちがした。が、男の歩く方向は鳥居の方の出口とすれば斜めに少し脱れてゐる。これではまた散歩のやうにぐるりと廻つて私の後を追つて來さうに思はれた。私は拜殿の裏へ廻つた。もし捨兒をした所が八幡の裏であつたとしたならそれは高い石垣だつた。いづれするなら此の拜殿の周圍に違ひなかつた。捨兒をする以上靜かで



人眼にかかる所でなければならぬ。が、ゐない。しかし、あの男は何ぜいつまでもこの周囲をうろついてゐるのであらう。手洗鉢の石の中で、樹の間を洩れた月の光りが水に映つてきらりと一つ光つてゐた。私はその男の歩行に感覺を働かせながら捨兒の所在を捜し廻つた。が、ゐない。男はときどきこちらの方を向きながら石疊の上で足數を算へるやうに俯向いて歩いた。ふと、私はその男が誰かとそこで待ち合せてゐるのではないかと考へた。もしそれが媾曳だしたら彼にとつて私のゐるのは明らかに邪魔だつた。私はもうそれ以上境内にゐる必要もなかつた。捨兒は嘘だ。さう云ふ珍事があつたとも思はれない程あたりは靜に落ちついてゐるではないか。もう私は捨兒を捜す氣がなくなつて來た。そのまま直ぐ境内を出て坂を降りた。歸つて女の嘘をせめてやらう。そのときの答辯の仕方では捨兒は事實であつたかどうかを判断しよう。が、それがもし事實であるとしてみれば私が捨兒を拾ひに出て來たのを彼女が知つてゐるからは彼女は私の留守に逃げ出してゐるやうにも思はれた。が、もし彼女に幾らかの我が子に對する愛情がある限り恐らく逃げ出すやうなこともしなからうと思はれる。またもし捨兒が嘘であつたとしてみれば、なほ

彼女は彼女の嘘にかかつて飛び出て來た私の愛情に對してでも逃げ出してゐるだらう。してみれば、彼女の逃げ出してゐるゐないは、別に彼女が捨兒をしたしないに明確な判断を與へるに何ら手がかりにもなりさうにも思へなかつた。と、また私は妻のことが頭の中に浮んで來た。例の坂だ。私は坂の中途に立ち停つて周囲を眺め廻して見た。が、やめた。危く私は私を見詰める妻の表情で萎れさうになつて來た。闇と瞑想とはいつの場合でも禁物だ。私は足早やに歩き出した。私は元氣を出した。邪魔するものを蹴りつけよう。私はもう泥溝に添つて歩いてゐた。暑いのに寒氣がする。出るときとは違つて高い倉庫の横から私は露路へ這入つた。家へ着くと女は額に疊の痕をつけて起き上つた。私は私から捨兒のことを言つてはまづいと考へた。

『氷を飲みたくはないかね。』

『ゐて？』と女は訊いた。

『君は嘘を云つたんだね。』

『何を？』

『そんなものなんかゐなかつたよ。』

『あら、さう。』と女は云ふと、眼を大きく開けて私の顔を眺めてゐた。「どうしたんでせう」とでも云ふやうに彼女の唇の片端は少し吊り上り、幽かな笑顔となつて何か遠くの聞き馴れぬおかしげな物音を聞きつけたかのやうな感じがあつた。私の疑ひなどはてんで受けつけないと云ふかのやうなその彼女の様子には、私のしつこい疑ひも全くとれた。

『可哀相だとは思はないかね。』

『ぢや、誰か連れてつたんだわね。』

『君は何とも思はないか?』

『だつて仕方がないぢやないの。』

『仕方がないことはないよ。どうにでもなつたんだよ。』

『ほんたうにゐなかつた?』とまた女は訊いた。

『あんまりのん氣だよ。自分の子供を捨てていて、そんなにのん氣になれると云ふのはどうかし

てゐるよ。とにかく人間ではないね。』

『殺すよりいいと思つたのさ。』

『殺すものも澤山ゐるだらうね。』

『ええ、ええ。』と女は自分に元氣をつけるやうに云つた。

『君は實際おかしな女だよ。それで少しも氣にかからないかね。』

『私捨てて來るとき見つかるかと思つて恐かつたわ。』

『さう云ふんぢやない。子供のことが何も心配にならないかと云ふんだよ。』

『そりやなるわ。』

『僕には心配してゐないやうに見えるがね。』

『だつて心配したつて仕方がないわ。』

『それが僕には分らないんだ。子が可愛くはないのかね。』

女は膝を立てると黙つて拗ねたやうな顔をして襖の隙間を閉めた。

『どこへ捨てといたんだね。』

『手洗鉢の横へ置いといたの。』

『そこも見たよ。』

『あの子、眠つてたのよ。』

『もし僕が拾つて歸つて來たらどうしたかね？』

『そしたら私育てるわ。』

『そんなら何ぜ捨てたりなんかしたんだね。』

『今急に可愛くなつて來たの。』

『とにかく馬鹿なことをしたもんだ。』

『もう誰か拾つたわね。』

『定つてるさ。』

『誰が拾つたのかしら？』

『分つたらまた貰ひに行くかね。』

『いい家だつたら捨てとくわ。』

『君の名前は何て云ふの。』

『石。』

『石？』

『ええ。』

『何と云ふ石だ？』

女は答へずに笑ひ出した。私はさう云ふ變な訊き方をするつもりではなかつた。が、もう一度名前を明瞭に訊き質さうと思ふ氣も起らなかつた。暫く黙つてゐると、

『私部屋を掃除しといたのよ。綺麗になつたでせう。』と女は言つた。

『ともかくもう眠るといい。起きてゐても仕方がないよ。僕は寝ないんだから。』

『ちや私寝るわ。』

『うむ、疲れたから寢床を敷くのはもう勘忍して貰はう。向ふの押入れに蒲團があるんだが。分るかね。』

女は立つて三疊の部屋へ這入つて行つた。

『分るかね？』

女は返事もせずに隣室で何處かへ突きあたるやうな音を立ててゐた。暫くすると彼女は荒々しく蒲團を踏みつけながら勝手に床を敷き始めた。私は彼女の無雑作なその様子を見てゐると身體が何となく浮き立つて來て晴やかな氣持ちになつた。女は蒲團を敷き終るとまた襖の所へ顔を出した。

『寢卷はないよ。』と私は云つた。

『いいわ。』

女は私を見て一寸笑つた。それは媚びでもなければ勿論おかしくもなささうな、いかにもかう云ふ場合聞かずに適當な感じのいい微笑であつた。

『眠くなれば起すよ。いいかね。』

『起して。私、寢坊よ。』

女は別に何の暗示も残さずに直ぐ襖を閉めた。それが私に思はぬ一滴の美しい感じを落してくれた。此の場合その美しい感じを感じ得られたと云ふこともまた私にとつてはなかなかの大切な誇りであつた。

『あなた、チョコレート食べてもよくてよ。』と、襖越しに女は云つた。彼女は床へ這入つたらしい。私はチョコレートを捜したがどこにもない。

街の道路のどこからか鐵板を叩く夜業の音が聞えて來た。私は少し落ちつきをなくしてゐた。が、私はその隣室の女に落ちるには臆病にも謙遜であつた。寢に謙遜は自分にとつても美德である。

『あなたは可哀相な方ね。』と暫くしてから女は云つた。

『何ぞだね？』

『奥様が逃げちやつてさ。』

『それでかね？』

『ひどい女だわね。』

『君は僕に同情するのかね。』

『全くひどい女だわ。』

『君の方がひどいよ。子供を捨てたりなんかして、全くひどいぢやないか。僕は子供に同情するね。』

『だつて、子供を捨てるより男を捨てる方がひどいわ。私なんか、捨てられたことはあるけれど男を捨てたことなんか一度もないわ。』

『さうかね、さう云ふのはいいね。頼母しい。』

『ほんとよ。私、自分から男を捨てたこととなくつてよ。捨てられてばかりよ。捨てられると口惜しいわね。』

『そりや口惜しい。君はそんなに何度も捨てられたのかね。』

『ええ。五度、六回目よ。』

『さうかね。』

『あなたは一度目でせう？』

『一度目だ。いやだね。君なんかはあまり我ままをするからだよ。』

『さうぢやないわ。男が悪いのよ。私なんかそりや親切にしてやるのよ。それでも男つて現金なものね。私にお金がある間うまいことばかり云つてるのさ。』

『君は金なんか貯めたんかね？』

『貯めたわ。私なんかお金でも持つてなけりや相手にしないわ。もうすつかりとられちやつたのよ。』

『それで赤ちやんを捨てたんかね？』

『ええ、さうよ。よく知つてるわね。』

『そりや僕も貧乏したよ。』

『いやだわね。』

『いやなもんだ。』

『赤ちやんなんか育てられやしないわ。ええ。あなただつたらどうして？』

私だつたらどうするか。私にも分らなかつた。ただ私は妻に逃げられただけである。

『私、こんどからお金を貯めても無いやうな顔をしてゐるの、持つても困るもんだわ。』

これは面白い。實際持つてゐても困るのだ。有るが故に愛されるとは悲劇である。

『所が金がないと、僕のやうに逃げられるよ。』

女は隣室でからからと高く笑ひ出した。

『あなた、お金がなくて逃げられたの？』

『さうだよ。』

『馬鹿馬鹿しいわね。』

『實際馬鹿な話だよ。こんなことつてない方がいいね。』

『奥さんに今度出逢つたらどうするの？』

『それが困るのさ。まさかよく逃げてくれたとも云へないし。』

『ひつばたいてやるといいわ。』

『君だつて今に子供にひつばたかれるぞ。』と私は笑ひ乍ら云つた。

すると、女は急に黙つて了つた。それぎり彼女は何事も云はなかつた。ふと彼女は泣いてゐるのではないかと私は思つた。實際のん氣に見える女性と云ふものは人々の思はぬときに不意に泣き出すものだ。彼女らの本性は生活の享樂的な部分にのみ生える草花の様で、しかしながら生活してゐると云ふ事の避く可らざる反證としての苦痛が、それだけにまた突如として彼女らの精神の弱つた一部をめぐけて斬り込んで来るにちがひない。此のため彼女らにとつて最も大切な生活上の武器は忘却と云ふ事だ。もし彼女達からその忘却性をとり上げて了つた代りに、慎ましかくな悔恨を強ひ續けていつたとしたら恐らく彼女らは餘りに重いその人生の苦痛のために根を抜か

れた草の様に滅びて了ふであらう。私は隣室の女にさう云ふ彼女の弱點について何事も言つてはならなかつたのだと云ふ事に気がついた。彼女は彼女の性格からもつとも子供のためにも自分の爲にも都合のいい方法を取つたのだ。今の場合われわれの忠言や批評は何らの建設的な裝飾にさへもならないと思はれた。見るがいい。彼女は子を拾はれてさも安らかに喜んで居ではないか。

微風が夜の窓から流れて來た。花の匂ひがする。浴衣が壁にかかつたまま靜に裾を靡かせてゐた。私は暫く窓に腰を下ろしてゐた。それからいつものやうに花屋のショーウィンドーを覗きに眠つた街へ出ていつた。花屋の窓の青い塗にはダリヤと百合と昨夜より數多くなつた矢車草とが刺さつてゐた。その一段と低い下にはガラスの鉢に盛り上つた石竹が。罌粟と薔薇と夏菊とは瀬戸の花筒から首を擡げて黙つてゐた。葉は庭を埋めて青々と水に打たれて光つてゐた。花花は花屋の人の眠りのためにそれだけ今は靜にのびのびと自由に見えた。しかし、傷つけられた醜い紫陽花の數輪は束を解かれたまま堅い土間の上に胸を横へて萎れてゐた。私はその夜遅くまで街を歩いてゐた。家へ歸つたときはどこかで鶏が鳴いてゐた。足がひどく汚れてゐて着物が肩に重く

濡りついた。私は足を洗つて着物を着變へると先づ煙草を一服ゆるゆると吸つた。空は靜に綠色に變つて來た。街道では車の轍の響がし始めた。空氣は夜明けの色の中で一層冷めたくなつた。私は竈に火を焚きつけて湯を沸かした。やがて部屋は煙を立ち籠めたままだんだんと明るくなつた。遠くの高い建物の窓硝子に最初の朝日を受けて桃色にきらきらと輝き出した。雀は勇敢であつた。彼らは屋根から屋根を一團となつて蹴りつけるやうに飛び廻つてゐた。

湯が沸き立つて來た頃、女は起きて來た。

『よく眠れたかね。』と私は訊いてみた。

女は黙つて笑ひ乍ら眼をこすつた。

『君は寢坊ぢやないね。』

『私、夢ばかり見てゐたわ。』

女が顔を洗ふ間に私は茶を淹れた。

『どうぞ。』

私は彼女の前に茶を差し出した。女は私の仕打ちを皮肉にとつて笑つてゐた。

『私、直ぐこれから行かなくつちやならないんだわ。』

無論私はとめなかつた。

『ね、私、これから八幡様へ一度行つて來たいわ。それから行かうかしら。』

『それもいいね。』

『あなたあそこまで一緒に行つてよ。』

『行かう。』

二人は茶を飲んでそれからまた家を出て行つた。路傍の水道栓は一人の主婦の傍ですがしがし水を吐き出してゐた。街の屋根看板は露に濡れて新らしく光つてゐた。家々の戸は開けられ出した。

『あなたまだ寝ないんだわね。』

『寝ない。』

『そんなことしちや毒よ。』

『早く死ぬかもしれないね。』

『さうよ。早くいい奥さんを捜すといいわ。』

『ないよ。』

『あつてよ。あなたにはいい奥さんを持たしたいわ。』

『資格があるかね。』

『あなたの奥様にや私のやうな女は駄目よ。』

私は何とも云へなかつた。

『俺も駄目だ。』

坂を登り出したとき、朝日はいよいよ明るく輝き出した。教會の尖塔は傾いた丘の上で、新鮮な樹の緑の波を突き切つてひとり空高く聳えてゐた。煙は家々の屋根の上に棚曳いたまま動かなくなつた。神社の境内へ這入つたとき、女は濕つたやうな石疊の上を、ひとり奥の方へ駈けていつ



た。

『ぬないわね。ここよ。』彼女は手洗鉢の石の前に立ち停つてその下を指差した。

『そこも見たよ。』

女は暫く物珍らしさうな微笑を浮かべながらその石のあたりを眺めてゐた。

『あの子、泣いたんだわね。』

私は黙つてゐた。露が樹の枝から落ちて來た。今は私は何事も云つてはならぬ。

『可愛らしい子よ。女の子。座蒲團へ巻いたのよ。ぬないわ。』

『いい人に拾はれたらいいがね。』

『さうよ。ねえ？』と女は私の顔を見上げた。

私は高い石垣の上から妻と捨兒とを飲み込んでゐる街を見降ろした。街は壯大な花のやうであつた。街は大きく起伏しながら朝日の光りの中で洋々として咲き誇つてゐた。

『ぢや、私歸るわ。すまなかつたわね。』と女は云つた。

私は女の方を振り向いて頷いた。

『さようなら。』

『さようなら。』

暫くして、女は朗らかな朝の空氣の中を身輕に街のどこかへ消えて了つた。

『俺は何物をも肯定する。』と、街は後に残つてひとり傲然として云つてゐた。

私はその無禮な街に對抗しようとして息を大きく吸ひ込んだ。

『お前は錯誤の連続した結晶だ。』

私は反り返つて威張り出した。街が私の脚下に横たはつてゐると云ふことが、私には晴れ晴れとして爽快であつた。私は樹の下から一步出た。と、朝日は私の胸を眼がけて殺倒した。

街へ出るトンネル

計介は通りすがりに自分の家へ寄つた。妹はダイナマイトを積み上げた箱の傍で、コッソリ鏡を覗いてゐた。彼は庭に立つたまま妹が誰を思つてゐるのかと一寸考へた。

『あら、兄さん、街へいらつしつたんぢやなかつたの。』

『うむ。』

『あのね、私、今日ラ・パロマを弾いたのよ。』

彼は黙つてまた表へ出ると、峡谷の片側にかかつた枕木の上を渡り出した。ふと彼はそこから崖の下へ墜落したトロツコの有様を眼に浮べた。満載された人々の身體が一齊に口を開け、岩角に弾動しながら渦の中へ突き刺さるやうに降り込んでいつた。だが、彼には人々の落ちる赤い口だけが、蝶々のやうにいつまでも眼に映つた。――

彼が九號のトンネルの入口へ來かかつた時、お熊は岩角へ太股を擦りつけて足の裏の石を抜いてゐた。計介は羊齒じばの叢の中から、新しいお熊の股と岩とを眺めてゐた。暫くすると、お熊は歪んだトンネルの口から穴の中を覗きながら、にやりと誰かに腐つたやうな微笑を投げかけた。と、代りにころころ石ころが轉んで來た。

計介はポケットから巻尺を出してお熊の傍へ出ていつた。彼はこれからトンネルの中へ遣入つて今日の進行を計らなければならなかつた。だが、それが彼には此頃は無氣味であつた。彼の父が穴の中で働いてゐる坑夫達の單價を上げずに頑張りに出してから、計介には誰も彼もが自分に向つて絶えず飛びかからうとしてゐるやうに思はれた。彼は右手のポケットに實弾を込めたピストルを入れてゐた。彼は恐怖を感じる毎に、そのピストルの口径の數字を咒文のやうに呟くのだ。

『何アにどんと一發さ。殺す奴は殺すがいい。』

しかし、彼はいつか自分達一家の者は、自分も父親も妹も、墜落したトロツコ同様峡谷の渦の

中へ投げ込まれるにちがひないと思つてゐた。實はあのトロッコと一緒に墜落した人々も、計介一家の利益を上げる過程への犠牲だと云へば云へた。だが、彼にして見れば、さうは簡単に社會學の抽斗くすだを開けて見る氣はしなかつた。それは峡谷の河口で發展する港が悪いのだ。港の電力が此の水道工事の作業を勝手に必要としてゐるからだと思つた。また彼は自分達一家に迫つてゐる今の此の恐怖さへ、實は港の發展に與へられてゐる一つの犠牲だと思つてゐた。

『とにかく俺は知るものか。あの下の港に訊くが良い。あ奴はひとり何もかも飲み込んでゐる怪物なんだ。』

そして彼はただ峡谷の横腹に掘られてゐるトンネルが、日日幾尺の岩石をぶち砕いて港の口の中へ進みつつあるかを尋常に計つてゐればそれで良いのだと思つてゐた。

『若旦那、もう直き雨になりますぜ。』

お熊は腰を振りながら、空虚のトロッコを穴の中へ押し始めた。濃霧は河口から噴き上げて來た。峡谷の黒い斷崖が油のやうに濕り出した。すると、濃霧は渦を卷かした峡谷の水の上を攻め

込むやうに唸りながら昇つて來た。

## 二

計介は冷い岩を探りながら穴の奥へ這入つて行つた。水が錐のやうに首條へ滴つた。時々奥の方でカンテラの光りが揺らめくと、突如として行手の曲つた岩角が、峻烈の陰を浮かべて明滅した。壓縮された歌がシャベルの音と一緒に壁に突き衝つて曲つて來た。

奥では杭に引つ掛かつたカンテラの光りの中で、二人の男がダイナマイトを差し込む穴を掘つてゐた。一人が歌を唄ひながら、鐵槌を打ち下ろす。すると、一人が掛け聲かけて鐵槌を振り上げる。此のリズムに調子を打つて、二人の尻に下つてゐる藁の座蒲團がぺたぺたと二人の尻を叩いてゐた。一度叩く度毎に、二人の打ち込む鐵鑿は、港へ、港へ、その港の口を狙つて進んで行く。

——『アー、お陽さま昇ると穴の中、』

——『そら來た。』